

# 縄文時代の飯綱町

—丸山遺跡・小野遺跡・明専寺遺跡・茶磨山遺跡を中心に—

綿田 弘実<sup>1</sup>

## 要旨

飯綱町の縄文遺跡は、中期前後の増減が少ない北信型の変動を示す。丸山遺跡の早期末葉・前期後葉土器は、墓制の一端を物語る。小野遺跡の中期末葉土器は、多系統が組成する北信の様相を示し、後期中葉には東北系土器がある。明専寺遺跡の後期前葉土器は長野系鉢・新潟系深鉢がセットとなり、茶磨山遺跡の晩期土器は北陸地方に通じる。飯綱町の縄文土器は在地のほか関東・新潟・東北との交流を語り、流通図書を通じて全国的に知られてきた。

## 1. はじめに

本稿は、飯綱町町制15周年を記念して、いいづな歴史ふれあい館（以下「ふれあい館」という。）が開催した、特別展『飯綱町の文化財』関連行事の第2回特別記念講演会の記録を大幅に改稿したものである。当該講演会は、令和3年（2021年）11月7日（日）、町民限定で万全の新型コロナウイルス感染対策のもと、飯綱町民会館大ホールを会場として行われた。講演会の内容は、主に遺構・遺物実測図を掲載したA4判6ページの配布資料と、それらの写真と町外遺跡事例を中心としたスライド画像によって構成した。

本稿で掲載する挿図は、表題の4遺跡の概要を示す当日の配布資料に近いものと、スライド画像などを実測図に代えた、長野県の参考事例を中心とする。そのほかに、再整理して復元され、ふれあい館に常設展示されている、明専寺・茶磨山遺跡出土の縄文後・晩期土器を実測図で紹介する。また4遺跡の発掘調査時と遺物写真をカラー写真図版4葉に掲載する。講演会当日間に合わなかった、筆者が47年前撮影した小野遺跡と、43年前撮影した明専寺・茶磨山遺跡の発掘写真も加えた。本文では、各遺跡の調査概要、主要な遺構と遺物、調査から今日までの調査成果の活用と研究の進展

を紹介することとし、特に成果の活用と研究に注目したい。講演会の冒頭で若干触れた考古学用語の解説などは省略した。

### (1) 筆者が参加した飯綱町（旧三水村・旧牟礼村）の遺跡発掘

筆者が県立須坂高校に入学したばかりの1975年4・5月の連休、郷土部の顧問小林孚先生が調査団長を務める三水村小野遺跡の発掘調査に、部員として参加した。発掘は3月下旬に開始されて4月にいったん中断し、連休から5月下旬まで行われた。この折、長野西高校郷土班顧問の笹澤浩先生とお会いした。調査後、出土遺物は須坂高校で洗浄・注記し、先輩の手ほどきで土器拓本図や石器実測図を作成し、遺物は文化祭一竜胆祭で展示したことがある。

4年後、立正大学文学部史学科に入学した1979年夏休み、県教育委員会文化課指導主事の関孝一先生の御紹介で、7月末から8月上旬、牟礼村明専寺・茶磨山遺跡の発掘調査に参加した。調査団長は國學院大学の永峯光一先生、千葉県の森尚登氏が調査主任、佐久穂町（旧佐久町）の島田恵子氏が調査員を務め、筆者のほか2名の学生が補助調査員として参加した。2遺跡並行で発掘を続け

1 長野市篠ノ井布施高田963-4 一般財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

ながら、期間の後半には主な遺物を洗浄・注記した。発掘後、分担した資料は各自が持ち帰って整理した。森氏には縄文土器の図化法を御指導いただき、卒論の相談もさせていただいた。

この調査後の9月中旬1週間、飯綱病院建設の着工1か月前に矢野恒雄氏が発見した、矢筒城館跡の発掘調査に、高校時代の後輩望月映氏とともに急遽呼ばれた。調査は米山一政団長の指導の下



小野遺跡発掘調査団の信大・長野西高・須坂高校生

実施され、小柳義男氏とお会いした。この調査は、後に第1次発掘と呼ばれることになる。

翌1980年夏休みの7月後半から8月上旬、前年度調査員を務めた島田恵子氏を主任として前田遺跡の発掘調査が行われ、大学の後輩近藤尚義氏とともに参加した。この調査で横山かよ子氏とお会いした。整理作業を通じて、島田氏から図面整理の方法や遺構の記述を御指導いただいた。

高校・大学時代に、旧三水村・牟礼村の5遺跡の発掘調査と整理作業に参加し、筆者にとって、考古学の調査研究に欠くことができない基礎的な技術を実地で体得する、貴重な機会となった。

このようないきさつから、ふれあい館が実施する町制15周年記念行事に、40年をさかのぼる昭和時代の発掘調査に参加した数少ない証人として、筆者が御指名いただくこととなった。併せて、ふれあい館紀要への寄稿の依頼を受けた。

## (2) 縄文時代の年代

日本の歴史の中で最古の時代は、およそ40,000年前から15,000年ほど前まで続いた、旧石器時代である。氷河時代に生息していた、今では絶滅した大型哺乳動物を追って、人びとは遊動生活を

送っていた(堤2009)。打製石器を主な道具とし、狩猟・採集によって食料を求めていた。旧石器時代に続き、縄文土器を用いた時代が縄文時代である。土器の発明によって、煮炊きする調理法で堅果類など食物の範囲が広がり、安定した植物食料の利用が可能となった。敏捷な中・小型動物を弓矢と猟犬を使って狩猟し、気候の温暖化によって内陸まで進入した海岸部に貝塚が形成され、漁労活動が活発化した。こうした狩猟・漁労・採集活動によって有効な資源利用が確立し、竪穴建物を構築する定住的集落が現れた。やがて2,400年ほど前、水田稲作農業が定着して食料生産が行われ、青銅製・鉄製の金属器を製作・使用した弥生時代に移り変わる。

縄文時代は、およそ14,000～13,000年間続いた。この長い年代は、土器の変化をもとに草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6時期に大別されている。放射性炭素年代測定値の較正年代によれば、各時期の推定年代は、およそ次のようである(小林2017、谷口2019)。

草創期：約16,000年から11,300年前。早期：約11,300年前から7,200年前。前期：約7,200年前から5,400年前。中期：約5,400年前から4,400年前。後期：約4,400年前から3,200年前。晩期：3,200年前から2,400年前。

この6大別時期の中は、地域によって差があるが、早期以降は地域ごとにおおよそ10から20の型式によって細分され、縄文時代の時間軸となっている。土器編年や集落研究では、さらに各型式を2・3段階ほどに細分し、土器変遷や住居群動態の詳細を解明する研究が試みられている。ちなみに長野県の縄文中期編年は15型式ほどであり、単純計算すると1型式約67年となる(宮崎・綿田2013)。最も細分が進んでいる諏訪地域は36段階で、1段階28年ほどとなり、現代人の1世代に近づいている(守矢2013)。

講演会では型式で時期を示す煩雑さを避け、各時期を初葉・前葉・中葉・後葉・末葉の5時期に区分して話を進めた。表題に上げた4遺跡に関連

する時期については、絡条体圧痕文土器は早期末葉、関山式期は前期前葉、有尾式期は同中葉、諸磯 a・b・c 式は同後葉、加曾利 E III・IV 式期は中期末葉、称名寺式期は後期初頭、堀之内 1・2 式（ひんご 1・2 式）期は同前葉、加曾利 B1 式期は同中葉、佐野 I a 式期は晚期前葉、佐野 I b・II 式期は同中葉とした。本稿もこれに準ずる。

## 2. 長野県・北信・飯綱町の縄文遺跡数変動の特徴 [図 1～3, 表 1・2]

長野県は、早くから縄文遺跡の宝庫といわれてきた。文化庁の平成 28 年度統計（文化庁文化財部記念物課 2017）によれば、現在全国に縄文時代の集落跡・散布地は 90,836 か所がある。長野県は 6,496 か所で、岩手県 8,014 か所、北海道 7,058 か所に次ぎ、千葉県 5,310 か所、福島県 4,656 か所ほかを超えて、第 3 位の多さである。この順位

表 1 長野県縄文時代遺跡数の変動（綿田 2021 を改変）

地域	遺跡合計	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明
	地域別%	地域別%	地域別%	地域別%	地域別%	地域別%	地域別%	
北信	716	15	84	183	290	98	46	264
	12%	38%	16%	18%	9%	11%	20%	12%
東信	1,131	6	74	245	556	222	28	512
	19%	2%	14%	25%	18%	25%	12%	24%
中信	1,165	6	129	232	585	179	34	512
	20%	2%	25%	23%	19%	20%	15%	24%
南信	2,838	13	228	338	1,727	405	123	836
	49%	33%	44%	34%	55%	45%	53%	39%
計	5,850	40	515	998	3,158	904	231	2,124
時期別%		1%	9%	17%	54%	15%	4%	

背景の一つには県域の広さがあり、遺跡密度や全時代に占める縄文遺跡の占有率を比較すれば順位は異なるだろう。

『長野県史考古資料編全 1 巻(1)遺跡地名表』（長野県史刊行会 1981）により、長野県の縄文遺跡数の変動を見てみよう（表 1）。刊行後 40 年を経た統計ではあるが、県内市町村ごとに時代別遺跡数を時期別に示し、遺跡ごとに土器型式を記載した唯一の刊行物である。その後の遺跡分布調査や発掘調査の進捗により、遺跡数と遺跡の内容は相当に変化しているが、今日も有効性を保つ文献と考えている。統計としての整合性も考慮して、越県合併した旧木曾郡山口村も削除しない。

この文献には、時期不明 2141 遺跡を含めて 7970 か所の縄文遺跡が記載され、飯綱町がある北信地域は 981 遺跡を数え県内の約 12% を占める。全遺跡を県域の面積で除した遺跡密度は、1km 当たり 0.587 である。北・東・中・南信各地域の縄文遺跡密度は、北信 0.381、東信 0.663、中信 0.369、南信 0.919 となり、北・中信が平均を下回る近い密度を示す。4 地域の遺跡数の推移は、いずれも中期を頂点とする山形の曲線を描く（勅使河原 2013、綿田 2017a）。前期から中期への増加率は県内平均 3.16、北信 1.58、東信 2.27、中信 2.52、南信 5.11 である。中期から後期への減少率は県内平均 0.29、北信 0.34、東信 0.40、中信 0.31、南信 0.23 となる。

縄文時代全般を通じて遺跡数が多い南信地方では増減が顕著で、この動きが長野県全体の遺跡数変動を際立たせ、全国的な特徴を顕現している。一方、飯綱町が所在する北信地域の遺跡数推移の

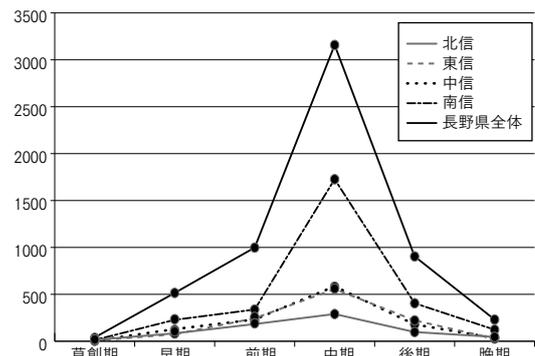


図 1 長野県縄文時代遺跡数の推移グラフ（綿田 2017a）

特徴は、前期から中期への増加は 4 地域で最も緩やかであり、中期から後期への減少も少なく、南信地域と対極的な変動を示している。これをグラフ化して比較すれば、長野県ではいずれの地域も中期を頂点とする山形の曲線を描くが、南信地域は極端に中期の山が突出する。北信は遺跡数が少ないが、中期前後の増減が少ない低い山形を示す（図 1）。

『長野県史考古資料編全 1 巻(2)』の「長野県の遺跡概観」（戸沢 1982）には、「縄文時代における地域文化の成立」という表題の図が掲載されている。これは、長野県の長水地区、諏訪地区、下伊那地区、千葉県、宮城県各地域内の遺跡数の、

表2 北信地方縄文時代遺跡数の変動（『長野県史考古資料編全1巻（1）』・『同（2）』から作成）（綿田 2012c）

\*『県史』に従い複数時期の遺跡は1時期1遺跡として集計した。各市町村の遺跡実数を超過する場合がある。  
 \*記号欄には千曲川左岸地域を「L」、右岸地域を「R」と記した。番号・記号は図2と符合する。  
 \*豊田村は千曲川流路変更前の村域として、左岸に位置付けた。

番号	記号	市町村	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	計	面積 kn <sup>2</sup>	遺跡密度 (中期)
1	L	栄村・飯山市	0	5	9	23	3	0	2	42		
1	R	栄・野沢温泉・木島平・飯山	7	19	44	73	22	7	22	194		
飯山下水内下高井小計①			7	24	53	96	25	7	24	236	631.09	0.374 (0.152)
2	L	豊田村	0	2	5	15	4	1	8	35		
2	R	中野市・山ノ内町	1	5	20	23	4	3	34	90		
中野下高井南部小計②			1	7	25	38	8	4	42	125	377.99	0.331 (0.101)
3	R	小布施・高山・須坂市小計③	1	3	10	19	7	4	31	75	267.41	0.281 (0.071)
飯水地区合計			9	34	88	153	40	15	93	339	1276.49	0.266 (0.120)
4	L	豊野・三水・牟礼小計④	1	4	13	28	10	7	21	84	95.21	0.882 (0.294)
5	L	信濃町小計⑤	2	15	33	18	9	4	17	98	149.27	0.657 (0.121)
6	L	戸隠・鬼無里・中条・小川・信州新・大岡⑥	1	6	20	42	10	5	37	121	475.7	0.254 (0.088)
7	L	長野市	2	7	13	19	12	6	54	113		
7	R	長野市	0	1	4	6	5	4	11	31		
長野盆地中央部小計⑦			2	8	17	25	17	10	65	144	404.35	0.356 (0.062)
8	L	更埴市・戸倉町・上山田町・坂城町	0	13	10	12	9	2	17	63		
8	R	更埴市・戸倉町・坂城町	0	4	2	12	3	3	10	34		
更埴市・更級・埴科小計⑧			0	17	12	24	12	5	27	97	173.48	0.559 (0.138)
長水地区合計			6	50	95	137	58	31	167	377	1298.01	0.290 (0.106)
北信地区合計			15	84	183	290	98	46	264	980	2574.5	0.381 (0.113)
東信地区合計			6	74	245	556	222	28	512	1643	2476.96	0.663 (0.225)
中信地区合計			6	129	232	585	179	34	512	1677	4540.89	0.369 (0.129)
南信地区合計			13	228	338	1727	405	123	836	3670	3992.81	0.919 (0.433)
長野県合計			40	515	998	3158	904	214	2124	7970	13585.22	0.587 (0.233)

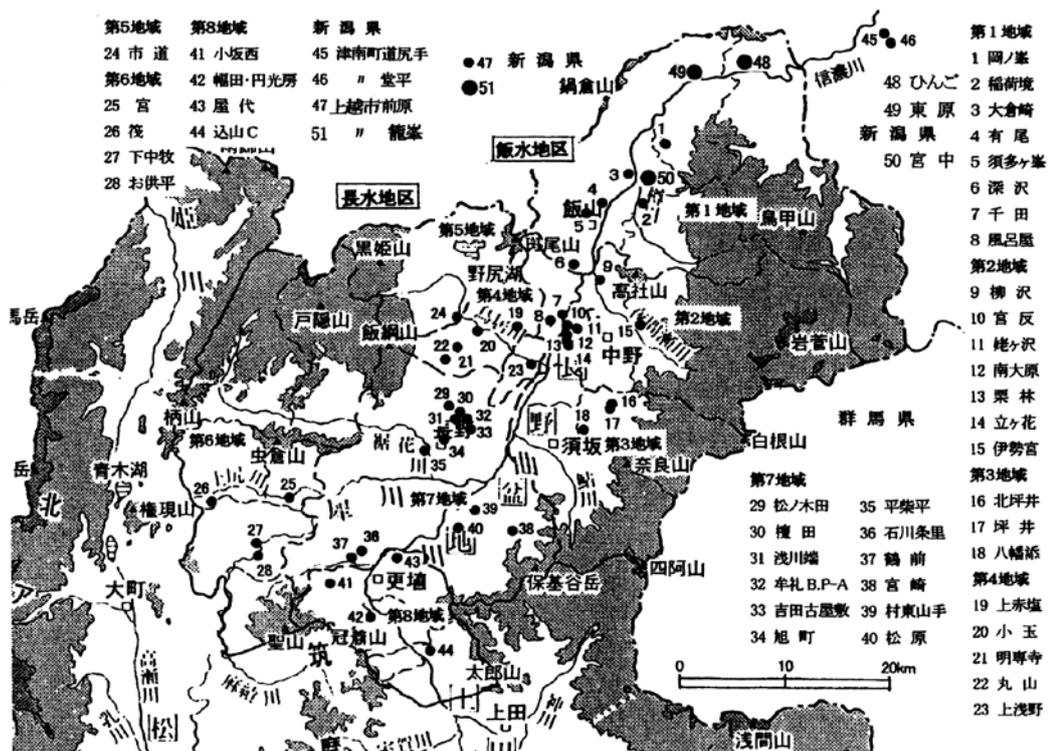


図2 北信地方縄文前・中・後期既発掘遺跡分布図（約 1:730,000）（綿田 2012b を改変）

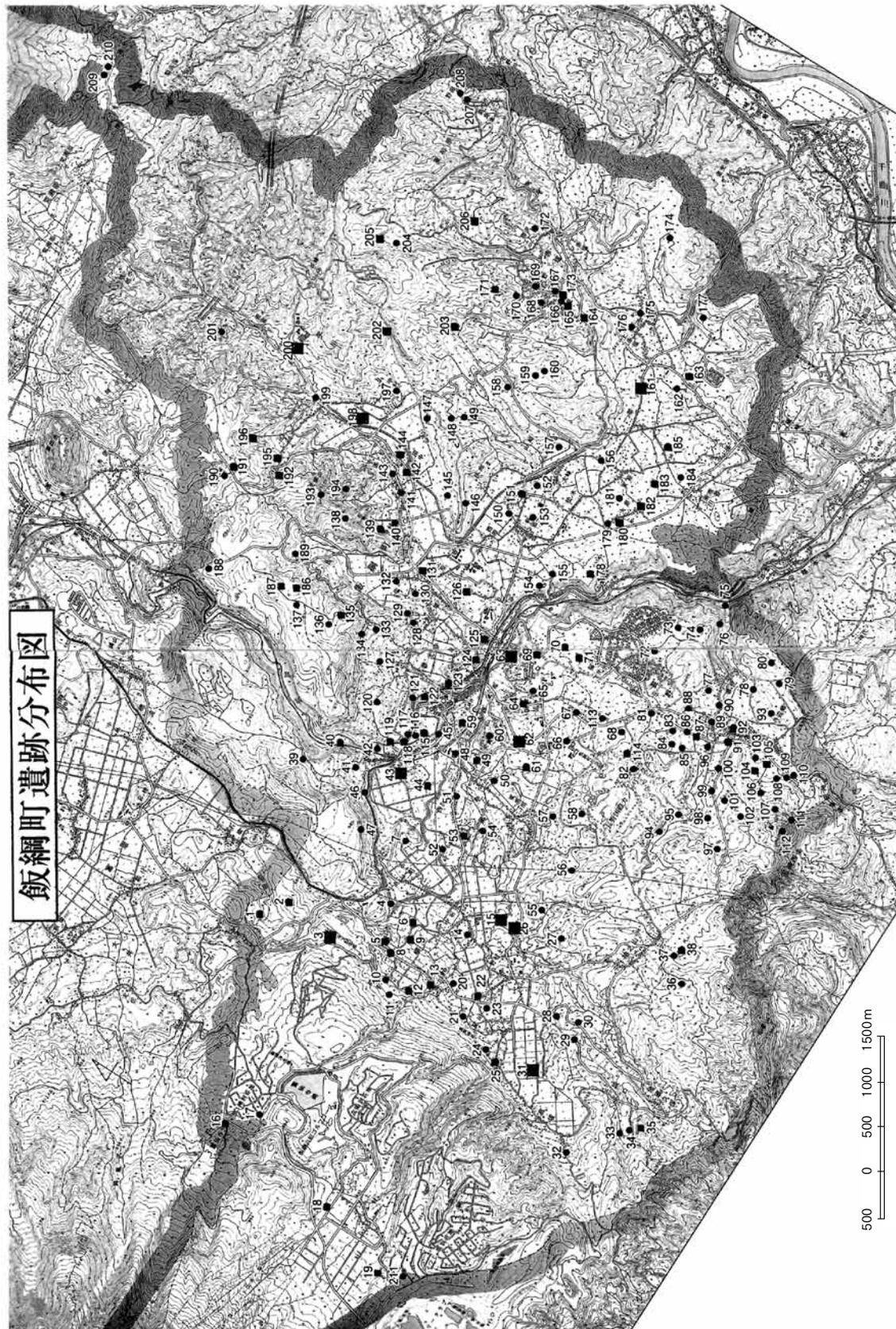


図3 飯網町遺跡分布図（飯網町教委 2017） ■・●：縄文時代遺跡

1 清水久保 2 宮浦 3 西樽川 5 石原 6 下向山 8 蟹原 9 大岩 12 南 13 横道 15 明専寺 16 霊泉寺 18 だづま原 19 つつじが原 22 築地屋敷 25 八蛇口 26 茶磨山 31 丸山 35 甘池 38 東久保 40 中川入 43 小玉 44 飯塚 49 八幡社 53 前田 59 裏町 61 七割 62 表町 63 橋詰 64 東前坂 69 大日影 70 宮の下 71 大久保 87 上ノ山 91 西浦北 92 東浦 104 長山 105 西浦中 114 前鷹山 115 鐘山 118 鐘山北 119 川入 122 岩袋 123 古城 124 原 125 普光寺東原 126 焚荒 131 菖蒲田 135 前林 139 寺村 142 田中下土浮 144 芋川氏館跡 151 久保 161 上赤塩 163 山ノ神 164 毛見 165 沖 171 林中 173 泉平 178 惣峰 180 中畑 182 大原 183 矢倉 185 一ツ屋 186 高頂 187 高頂北 191 番屋 192 赤はげ 195 京洛 196 天神 198 小野 200 伊豆ヶ入 202 扇久保 203 上今田 205 天沢 206 東柏原

縄文早期から晩期 5 時期別比率を棒グラフで比較したものである。この図を見ると、長水地区は早・前・後・晩期は長野県内平均を上回り、中期は大きく下回っている。逆に中期は諏訪・下伊那地区が平均を上回っている。千葉県では後期、宮城県では晩期が突出して比率が高い。特定の時期・地域に縄文文化の発展がみられる状況は、それぞれの地方に適応した生活が、時期をかえて顕著な発達を遂げたことを示しており、縄文文化の多様な「地域文化」の存在を示すと指摘する。このような文化を表徴的に表現し、中部山岳地帯の中期文化を「井戸尻文化」、千葉県に代表される後期文化を「貝塚文化」、宮城県に代表される晩期文化を「亀ヶ岡文化」と呼んでいる。飯綱町がある長水地区は、このグラフの中では縄文中期の井戸尻文化とはやや異なる位置づけとなる。

北信でも小地域ごとに縄文遺跡数の推移に差がある(表 2, 図 2)。郡にかかわらず、千曲川の左岸・右岸に区画し、隣接地域を区切って遺跡数推移を比較してみる(綿田 2012c)。下流側の飯水地区(表 1 - 第 1 ~ 3 地区)は 339 か所、上流側の長水地区(同第 4 ~ 8 地区)は 377 か所と、ほぼ同数の縄文遺跡が分布し、遺跡密度もほぼ等しい。子細にみると、長水地区内では小地域によって遺跡密度の差が大きく、中期遺跡密度にも反映されている。飯水・長水地区とも、中期遺跡数に対する前・後期遺跡数の比率が高く、特に前期遺跡の比率が高い。飯綱町の北に隣接する信濃町では、草創期から早期、前期にかけて遺跡が増加し、中期から減少に転ずる変動は特異である。

合併後に調査が行われた、『飯綱町遺跡詳細分布調査報告書』(飯綱町教育委員会 2016, 以下教育委員会は「教委」という。)には、町内の全遺跡の分布と内容が記載され、遺跡群の全体像が分かる。これによれば、全遺跡数は 211 か所、複数時代にわたる遺跡を時代別には数えると、旧石器時代 16 か所、縄文時代 75 か所、弥生時代 9 か所、古墳時代 8 か所、奈良時代 6 か所、平安時代 134 か所、中世 59 か所、近世 10 か所である。時代別

の占有率は、平安時代 42.3%に次いで、縄文時代が 23.7%を占めている。次いで中世 18.6%であるが、その他の時代はそれぞれ 5%以下であり、飯綱町は縄文時代遺跡が相対的に多い地域とみられる。ただし、同書の中で町内遺跡の時期別数の特徴として、「縄文時代の遺跡数は多いが、長野県全体の傾向と比較すると半分ほどの割合である」と指摘している。これまで記述したように、縄文遺跡の半数近くを占める南信地方の動向を反映した県全体の数値と比較すれば、このとおりである。町内の全遺跡分布図に加筆して縄文遺跡を■、そのうち発掘調査された遺跡を■で表示し、キャプションで遺跡名を示したが(図 3)、分布・立地の特徴などはまだ把握してはいない。

### 3. 丸山遺跡の尖底土器と有孔浅鉢

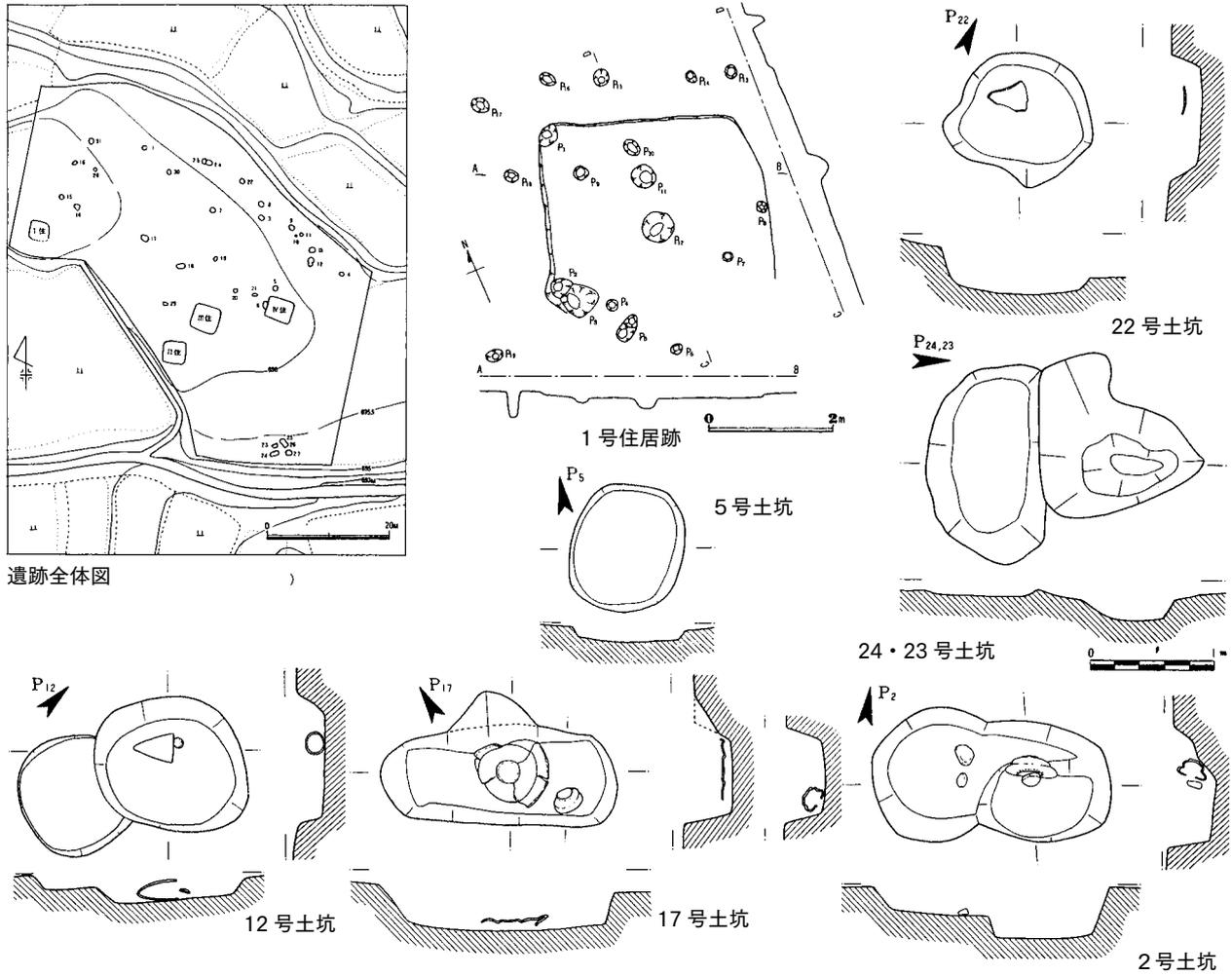
[図 4 ~ 7, 図版 1]

#### (1) 調査の概要

丸山遺跡は、昭和 52 年度牟礼村高岡地区の圍場整備事業に伴って、記録保存を目的に発掘調査された。調査団長を高橋桂氏(飯山北高校教諭)に委嘱し、発掘は昭和 52 (1977) 年 8 月 3 日から 8 月 7 日に行った。調査員・補助員は連日 20 名前後が参加した。8 月 7 日には現地公開を実施し、約 200 名の見学者が訪れた。発掘調査報告書は 1979 年 1 月刊行された(牟礼村教委 1979)。調査面積は記載がないが、2000 ~ 2500m<sup>2</sup>である。

遺跡は大字高坂字丸山 803・804 に所在し、大丸山・小丸山と呼ばれる微高地にある。高坂地区東側の谷間の水田地帯に位置し、南北が侵食されて残った東に延びる舌状台地に立地する。残丘ともいえる微高地であり、標高約 695m から 697m の頂部に遺構が分布する(図 4)。

検出された遺構は、縄文前期の住居跡 1 軒、縄文前期を中心とする土坑 31 基、平安時代の竪穴建物跡 3 軒である。出土した縄文土器は、早期末葉、前期前葉・後葉・末葉、後期中葉に属し、前期後葉が主体を占める。



遺跡全体圖

图4 丸山遺跡遺構分布圖 (1:1,200) · 遺構 (1:120) (牟礼村教委 1979)

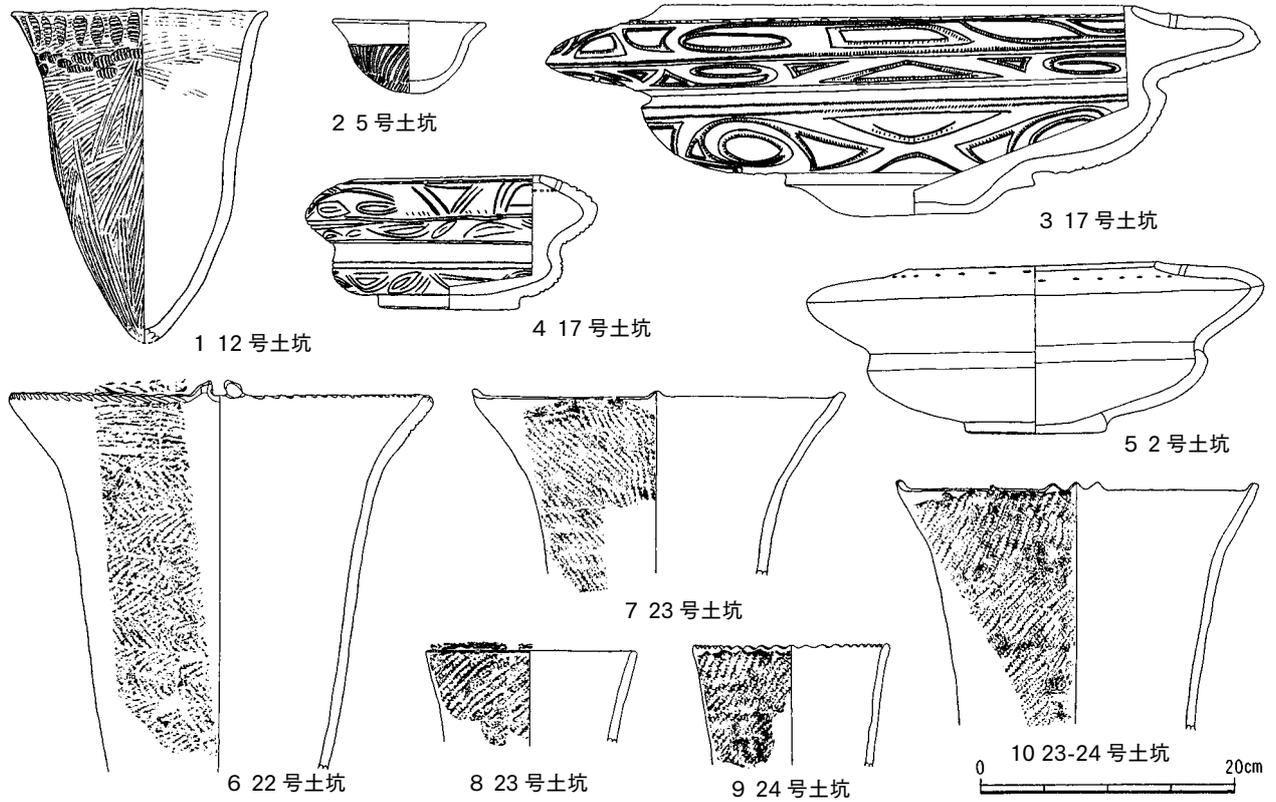


图5 丸山遺跡出土繩文早・前期土器 (1:6) (牟礼村教委 1979)

## (2) 遺構と遺物

1号住居跡(図4) 南半分の壁が確認されず、東西320cm、南北現存300cmで、長方形プランと推定される。住居跡に伴うピットは、住居跡に内12個、住居跡外に7個ある。住居内壁際の支柱穴2個は深さ約40cmと深く、中央のP12ではわずかに焼土が検出され、地床炉と推定される。住居外のピットは深さ30～50cmで、規則正しく並んでいる。少量出土した土器は、関山式と神ノ木式であり、住居プランからも前期前葉の関山式期とされる。

土坑群(図4) 31基が検出された。舌状台地の中央頂部から北縁部にかけて長く散在するAブロックに26基、台地南縁の小範囲にまとまるにBブロックに5基が分布する。出土遺物から推定できる時期は、早期末葉1基、前期後葉諸磯a式期1基、同b式期12基、同c式期5基、後期中葉加曾利B式期1基、不明11基である。

12号土坑は2基が切り合い、いずれも早期に属す。新しい12B号土坑は、長径125cm、短径110cmの不整形プラン、深さ約10cmである。底面に密着するように横倒しの状態で、早期末葉の絡条体圧痕文土器1個体(図版1-2、図5-1)が出土した。口縁部に接するように径10cmほどの扁平礫が伴った。

遺物から時期が推定される土坑の大部分が前期後葉で、特に諸磯b式期の土坑からは、ほぼ完形の有孔浅鉢形土器が出土し、注目される。5号土坑は長径105cm、短径90cmの楕円形プラン、深さ10cmである。諸磯a式の小型浅鉢形土器(図5-2)が出土した。

2号土坑は長径195cm、短径110cmを測り、中央でくびれる瓢形プランを呈し、西半分a土坑が深さ25cm、東半分b土坑が1段深く40cmである。a土坑の縁からb土坑に向かって落ち込むように、諸磯b式の有孔浅鉢形土器(図版1-4、図5-5)が傾いて出土し、口縁部前に人頭大の河原石が蓋をしていたような状態で横たわっていた。

17号土坑は、長径190cm、短径80cm、深さ34

cmの長方形プランである。大小2個体の有孔浅鉢形土器が出土した(図版1-3・5～7)。大型浅鉢(図5-3)は土壇中央やや北寄り、裏返した状態で底部を上にして出土した。北壁に接した罫の部分は土圧で折れ曲がったように直立し、他の部分は底面から5cmほど浮いて平たく押しつぶされていた。小型浅鉢(図5-4)は10cmほど東にあり、南壁から流れ込むように斜めに裏返して、床面から10～15cm浮いた状態で出土し、内部に土が詰まって、つぶれてはいなかった。埋土中に他の土器破片や礫は少なく、炭化物が多量に混入し、南壁の一部が焼成を受けて赤色化していた。ほかに骨片と思われる白色の粉末が検出された。

29号土坑は、長径92cm、短径68cmの楕円形プラン、深さ50cmである。諸磯b式土器片と、復元可能な黒色精製の浅鉢形土器が出土し、指頭大の人骨片10数片が検出された。

ここでは詳細な調査記録をもとに特徴的な土坑のみを紹介したが、報告書では県内外の事例と比較し、規模・形態と骨片出土例から、浅鉢形土器も土坑墓に関わる機能が推定されている。また、前期前葉の1号住居跡の時期に属する土坑は確認できず、前期後葉には見晴らしのよい台地上を墓域として、近接した場所の集落領域と対をなしていたと推定している。

縄文早期末葉の絡条体圧痕文土器 12号土坑からほぼ完形の絡条体圧痕文土器が出土した(図5-1)。口径19.8cm、高さ26.8cmの尖底深鉢で、欠損する底部の端部はわずかに丸みを帯びるらしい。胎土に繊維を含む。外面は外反する口縁部には横位、胴上部には斜位、下半部には縦位の条痕文を施し、口縁部内面には浅く横位の条痕文を施す。口縁部にはやや間隔をあけて縦位、その下位に横位2段の絡条体圧痕文を施す。撚糸Rを巻き付けた原体の軸は植物の茎のような軟質で、1単位の圧痕文の中央部分が深く押されている。報告書では、絡条体圧痕文を型式の指標とする子母口式に位置付けられた。今日も同様に説明されている(飯綱町教委2021)。

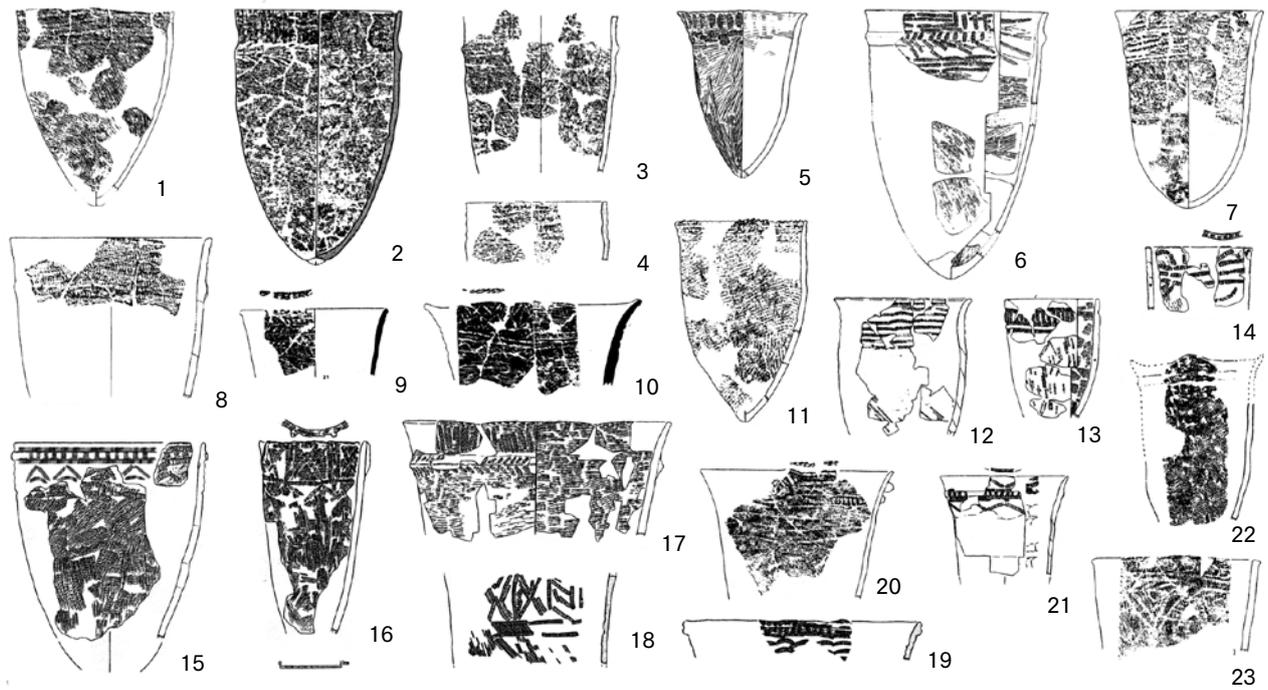


図6 長野県出土縄文早期末葉絡条体圧痕文土器 (1:12) (綿田 2000 から抜粋)

1 枇杷鳥. 2 東裏. 3・4 日向林A. 5 丸山. 6 風呂屋. 7 上林中道南. 8 大日ノ木. 9・10 男女倉. 11 戻場. 12 下茂内. 13・14 向六工. 15・16 ほうろく屋敷. 17 桜田. 18・19 膳棚B. 20 梨久保. 21 高風呂. 22 殿村. 23 の場

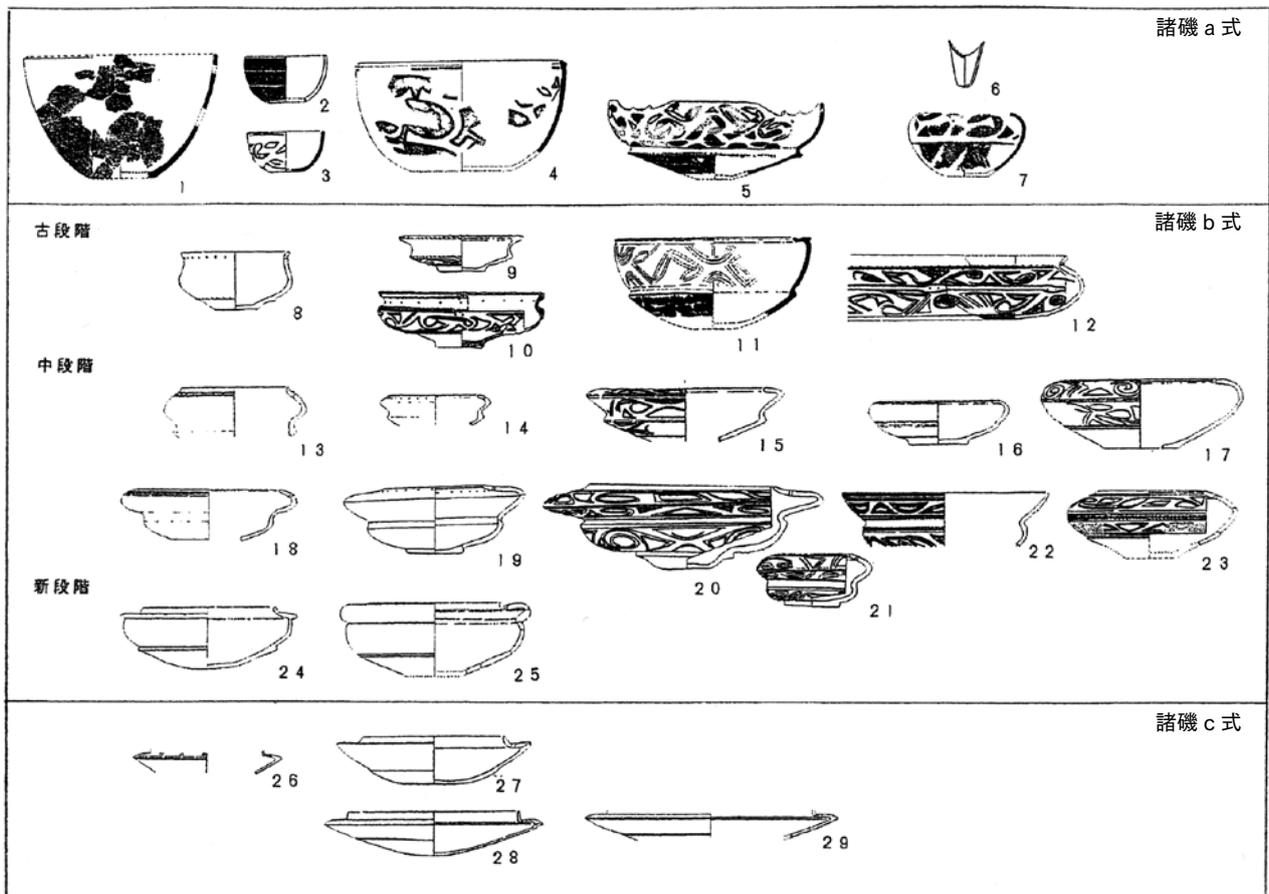


図7 長野県出土縄文前期後半浅鉢形土器の変遷 (1:15) (贄田 2010 を改変)

1・3~5・7・11 阿久. 2・6 南大原. 8・9・13~18・22 松ノ木田. 10・23 上浅野. 19~21 丸山. 24 立ヶ花. 25 鍛冶屋. 26 風呂屋. 27~29 松原

縄文前期後半の有孔浅鉢（特殊浅鉢）17号土坑から大小2点の有文の有孔浅鉢、2B号土坑から無文の有孔浅鉢1点が完形で出土した（図5-3～5）。屈曲が強い扁平の特異な器形から、特殊浅鉢とも呼ばれたが（金井1979）、口縁部をめぐる多数の孔列が特徴であり、今日是有孔浅鉢と呼ばれる。前期前葉から中葉には、口が開いた浅鉢が少数見られるが、後葉の諸磯b式期には上から押しつぶしたように丈が低く、口縁部が内湾して孔が巡り、胴が強く屈曲する浅鉢が現れる。最初は深鉢と同じ木の葉文を描くが、徐々に無文が多くなる。諸磯c式期には無文ばかりとなり、肩から胴への屈曲が強い釜形と呼ばれる器形に変化する（図7）。

報告書では、飯山市大倉崎遺跡の調査成果（金井他1976）をもとに、浅鉢形土器を含め、諸磯b式を新旧に2細分している。諸磯b1式土器は縄文のみの深鉢形、爪形文の深鉢形、浮線文のキャリパー形、篋切文の浅鉢形のセット、諸磯b2式土器は縄文のみの深鉢形、平行沈線による凸レンズ状文の深鉢形、無文の浅鉢形のセットとした。この細分案は、1980年代から盛んになる、諸磯式土器細分編年の先駆的な研究である。

### (3) 成果の利用と研究の進展

絡条体圧痕文土器について この土器は、調査当時は数少ない早期の完形土器であり、復元に当たって東京国立博物館の協力を得たこともあり、報告書刊行前の昭和53（1978）年6～8月、東博に展示され著名となった。このため、小学校の社会科資料や、大部な『縄文土器大観1』（宮下1989）に展開写真が掲載されることとなった。

1978・1979年信濃毎日新聞誌上に連載された「編年—中部高地の型式—」を一書にまとめた同名の刊行物（児玉1980）では、「絡縄体圧痕文土器」の標準資料として、「丸山式土器」の命名に言及している。「絡条体」にこの用字はないが、あえて使っているのは、『信濃史料 第1巻』（信濃史料刊行会1956）の記載に準じたからであろうか。

筆者は第13回縄文セミナーに際して、長野県

の茅山上層式以降の早期末葉土器を集成し、2000年当時図化されていた資料を集成した（図6、綿田2000）。この頃には、長野県には子母口式土器はほとんど分布せず、地域的な別型式の存在が知られ、絡条体圧痕文土器は茅山上層式以降早期終末まで、今日の炭素年代では500年前後の時間幅の中で、数段階の変遷を遂げて存続したことが定説となっていた。

曲線的な意匠を描くには融通が利かない原体のためか、文様は縦・横・斜めとその組み合わせで、編年しにくい類である。地文は内外面条痕文→外面条痕文→撚糸文→縄文と変遷する。各段階に伴う、編年位置がわかっている東海系土器を確認して編年案を考えた（綿田2003b）。口縁部に隆帯が巡るものと、それが無いものの2者があり、変化の方向性が多少異なるように思う。信濃町にも絡条体圧痕文土器の資料は多く、丸山例と近似するものばかりである。東海系土器などが伴わないため、未だ編年位置に確信がない。茅山上層式に近い古い段階と考えているが、どうであろうか。

諸磯b式有孔浅鉢などについて 諸磯b式期の有孔浅鉢について、調査担当者の一人金井正三氏は、この種の土器の分布と変遷、出土状況と土器の使われ方を明らかにし、『信濃』誌上に発表して研究が進展するとともに、丸山例が広く知られるようになった（金井1979）。その後谷口康浩氏は、大冊『縄文土器大観1』に諸磯様式の有孔浅鉢の代表例として実測図を掲載した（谷口1989）。小杉康氏は、諸磯b式中段階には、木の葉文浅鉢形土器（n土器）と模倣製作された土器（n'土器）が、関東・中部地方の諸磯式土器圏と、西日本の北白川下層式土器圏の間で、威信財として扱われ、儀礼的处理を伴って搬出・搬入されて模倣品製作が行われ、それが逆輸入されるなど、両土器型式圏の間にn土器とn'土器の循環的な流れを推定した（小杉1985・2003）。この論考の中で、丸山遺跡の有孔浅鉢が大きく取り上げられた。

昭和56（1981）年4月20日、早期末葉絡条体圧痕文土器1点（図5-1）、前期後葉浅鉢形土器

3点(図5-2~4)は、有形文化財「丸山遺跡出土縄文土器」に指定され、ふれあい館に常設展示されている。町内では人文系最古の指定文化財である。

第27回縄文セミナーでは縄文前期浅鉢形土器をテーマとした。関東、中部、東海から近畿地方の図化個体を集成し、変遷と分布が検討された。丸山遺跡の大小の有文浅鉢と無文浅鉢は、両者が併存する諸磯b式中段階の新相を示す代表例として掲載された(図7, 贄田2010)。

八ヶ岳山麓の国史跡・原村阿久遺跡では、外径120mに及ぶ諸磯式期の環状集石群と住居跡が検出され、多量の遺物が出土した(長野県教委1982)。長野市(旧豊野町)上浅野遺跡では、調査面積は阿久遺跡よりはるかに小さいが、住居跡がなく、径20m程と予想される68基の集石遺構ばかりが検出され、そこから出土した土器は深鉢より有孔浅鉢が多いという(笹澤2001)。笹澤浩氏は、集石遺構を墓地と推定し、有孔浅鉢を葬送儀礼に伴う祭具と考えている。飯山市大倉崎遺跡でも30%ほどがこの器種という(金井他1976, 飯山市教委1990)。諸磯式の本拠地関東地方より有孔浅鉢の比率が高く、この器種だけを多量に保持し、墓壙への埋納や集石遺構に伴う儀礼的な扱いなど、使い方に差異がありそうな北信地方と、関東地方との交流がうかがえる。

諸磯c式期に無文の釜形となった有孔浅鉢は、前期末葉から中期初頭に不明瞭な存在となるが、中期前葉から中葉には壺形や甕形、樽形となって有孔罎付土器が出現する。中期後葉には鉢形が増え、器壁ではなく小孔を罎にあけたものとなる。末葉には瓢箪形注口土器が出現する(阿部2008)。後期初頭には注口土器へと変遷を遂げる。中期の有孔罎付土器には太鼓説と酒造具説があつて、今も決着していない。この祖型といわれるのが前期後葉の有孔浅鉢であるから、まだ用途は明らかになっていないといえる。

有孔浅鉢以外の深鉢形の各種も分類が変わっているものがある。報告書で諸磯a式とされた

格子目文土器、諸磯b2式とされた平行波線文土器、縄文のみの深鉢形のうち横羽状縄文を施すものは、新潟県に主体的に分布する刈羽式土器に帰属することが明らかになった(寺崎2011)。格子目文土器は、西樽川遺跡に実測個体がある(小柳1997)。平行波線文土器は大倉崎類型と呼ばれ、山形県の南端にある高島町押出遺跡で有孔浅鉢とともに多数出土している。逆に長野県では、長野市(旧信州新町)お供平遺跡(信州新町教委1989)で、東北地方将来石器とされた珪質粘板岩または珪質泥岩製の尖頭器状の石器が出土していることが注意される。

押出遺跡は低湿地遺跡で、有機質遺物が多く出土した。特に赤漆を地に塗って黒漆で文様を描いた、彩漆有孔浅鉢の優品が多い(水戸部2019)。全面を赤彩したものもある。ヘラや竹管で描いた沈線文様がなく、色漆だけで描き分けた文様は、大倉崎遺跡にも上浅野遺跡にも痕跡を残す資料がある。丸山遺跡の無文有孔浅鉢も、本来は彩漆土器であった可能性は十分であろう。

#### 4. 小野遺跡の縄文中・後期土器と注口土器 〔図8~11, 図版2〕

##### (1) 調査の概要

小野遺跡の発掘調査は、昭和50年度県営圃場整備事業に伴って、記録保存を目的として行われた。調査団長を小林孚氏(須坂高校教諭)、調査主任を笹澤浩氏(長野西高校教諭)に委嘱した。発掘は昭和50(1975)年3月19日から5月29日に行った。この間、3月末日以降は作業を行わず、4月・5月の連休中に集中して作業を進め、それ以降は土・日曜日に少人数で作業を行った。調査員には長野市周辺の有識者や信州大学生、補助員には三水村民と長野西高郷土班員、須坂高校郷土部員などが参加した。調査面積は1,088㎡となった。調査終了後、謄写版印刷の概報を刊行し、表紙には完形の注口土器写真を貼付している。三水村公民館報にも調査成果が紹介された。

基礎整理の経過は冒頭で一部ふれたが、進学後

筆者が卒論作成のため須坂高校に保管されていた土器を選び、一部を借り出して復元・実測・撮影し、土器図版を作成した。この時の実測図は、後に原図として再トレースされ、報告書に掲載されることとなった。卒論の図版は、県埋蔵文化財センター



小野遺跡発掘調査状況

に就職後、小林孚先生のお許しを得てセンター紀要に掲載し、北信地方の縄文中期末葉土器の様相を記述する中心資料とした(綿田 1988a)。その後約 20 年を経て、笹澤浩先生の指導により、平成 20～23 年度に整理作業が行われ、平成 24 (2012) 年 3 月、飯綱町教育委員会が発掘調査報告書を刊行した(飯綱町教委 2012)。発掘調査から 37 年後、内容豊富な調査成果の全容が公開された。

遺跡は飯綱町(旧三水村)大字芋川字小野 4076 に所在し、南流する斑尾川左岸の丘陵台地に立地する。ここは小規模な斑尾川扇状地の扇央部分に当たり、北から南に向かって緩やかに傾斜する。調査地の西側に比高 1.5m 前後の段丘崖が発達しているが、現在はわずかに痕跡をとどめるにすぎない。標高約 540m から 545m 辺りが調査地点である。

検出された縄文時代の遺構は、前期の住居跡 1 軒、中期末葉・後期前半の住居跡各 1 軒、後期前葉の敷石住居跡 1 軒、中・後期の土坑 27 基である。これらは中世以降の建物建立に伴う整地と、その後の耕作によって削平され、遺存状態は良くない。

出土した遺物量は、コンテナ (50 × 40 × 15cm) 120 箱分である。縄文土器は、前期中葉・後葉、中期前葉・中葉、後葉から末葉、後期初頭・前葉・中葉に属し、中期末葉から後期中葉は継続的で主

体を占める。石器は総数 370 点に上る。器種の内訳は、石鏃 27 点、石錐 8 点、小型削器 3 点、横刃形石器 7 点、打製石斧 192 点・剥片 104 点、磨製石斧 21 点、凹石 41 点・破片 3 点、蜂ノ巣石 30 点、磨石 15 点、叩石 8 点、石皿 16 点、小型石皿 2 点、石棒 1 点、丸石 3 点、砥石 2 点である。

## (2) 遺構と遺物

竪穴建物跡と敷石住居跡 SB01 竪穴住居跡(図 8)は前期中葉・有尾式期であった(図 9-1・2)。直径 2.8m の不整な円形プランである。柱穴は床面に 4 個と壁沿いに 5 個ある。中央北西寄りに地床炉がある。SB02 竪穴住居跡は壁と床面の一部が確認されたのみである。土器は中期後葉から後期前葉までがあり、これらの中で最も新しい石神類型の時期に帰属すると考えられる。SB03 竪穴住居跡は、径 20cm 前後のピットが円形



敷石住居跡を調査指導する小林孚先生

に認められることから付番したが、住居跡とするにはやや不安がある。中期末葉の土器が多い。

SB04 敷石住居跡(図 8)は試掘トレンチで手前側の敷石が残っていないが、直径 5.0m の円形プランである。竪穴内の中央部にある石囲炉南側に、安山岩の平石 25 枚程度を 2.0 × 1.0m の範囲に敷詰めている。炉の東側の敷石がなくなる部分には、90 × 60cm の範囲に多量の焼けた動物骨が集積していた。動物骨片は整理箱 (60 × 40 × 15cm) 1 箱ほどである。微細破片を除いて鑑定したところ、ニホンジカ 27 点、イノシシ 25 点、イヌ 2 点である。動物骨は角や頭骨から四肢骨に至る全身骨格がほぼそろっている。性別不明であるが、比較的若い

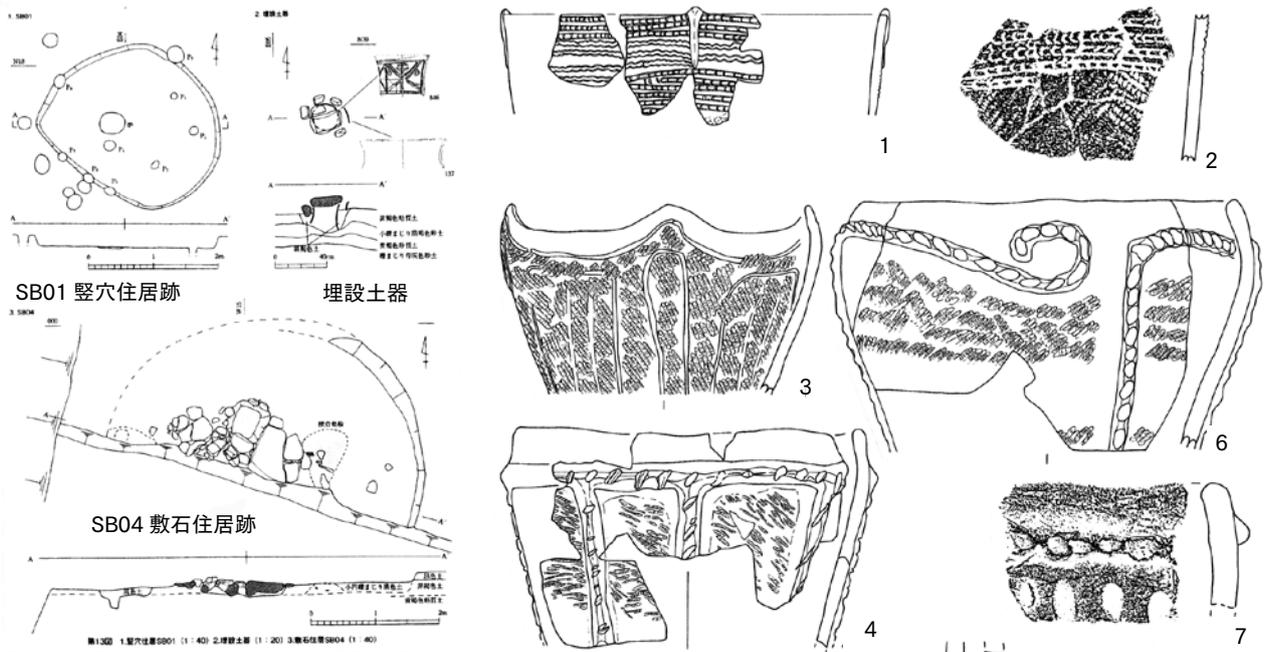


圖8 小野遺跡遺構 (1:120) (飯綱町教委 2012)

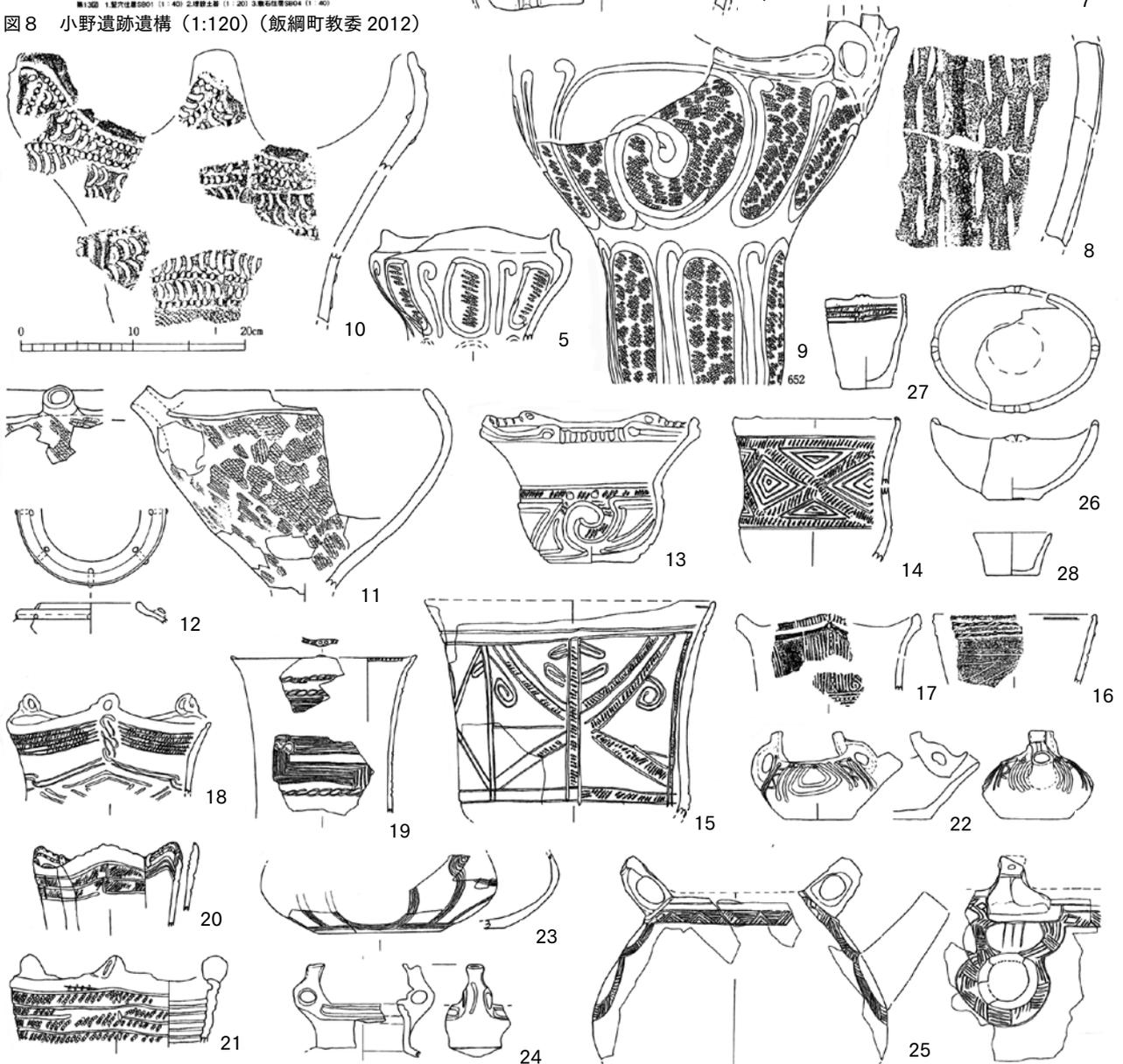


圖9 小野遺跡出土縄文前・中・後期土器 (1:6、1:4) (飯綱町教委 2012)

個体が多く認められるという。屋内の動物供犠の事例として重要である。

土坑群 縄文時代に属する土坑は、大型のピットを含めると総数 27 基であり、多くが調査区の東辺に沿って弧状に分布し、西側に多数のピット群と竪穴住居跡をとりまくように見えるが、調査区外の状況が不明のため断定はできない。土坑は群を構成するものと単独の場合があるが、それらは弧状分布域の中に納まるか住居跡群の周辺にある。帰属時期には、中期後半と後期中葉とがある。土坑群には 4 群がある。土坑群 1 は SK07・18・23・14 の 4 基、土坑群 2 は SK08～13・16・19、大型ピット J30P1、I29P1・2 も土坑とすれば 11 基、土坑群 3 は SK20・21・22 の 3 基、土坑群 4 は SK02・03・04 の 3 基である。単独の土坑には、SK29・06 がある。中期後葉から末葉に属するのは、土坑群 2 と SK06・29、土坑群 1 の SK07 である。後期中葉に属するのは、土坑群 4 と土坑群 3 の SK20 である。ほかに堀之内 2 式期の、石蓋を伴う逆位の埋設土器（図 8、図 9 - 15）もある。

この中で、長径 190cm の楕円形土坑 SK02 からは、上面観が楕円形の小型浅鉢（図 9 - 26）が出土している。出土状況の記載はないが、土坑墓の副葬土器の可能性が高い。関東地方南西部では加曽利 B1 式期頃、小型の浅鉢や椀形土器を副葬する風習が見られる。長野県では群馬県と接する東信地方にわずかに認められるが、土器の副葬は盛んではない。少数例として注目したい。

縄文中期末葉の小野遺跡の土器（図 9 - 3～12）を見ると、加曽利 E III 式系の土器（3～5）が最も多いようである。やや内湾する口縁部に幅狭の無文部を残し、沈線・隆帯を巡らせて横に区画し、胴部を縦に区画するバケツ形の深鉢（3・4）や、胴部でくびれて楕円文や蕨手文を上下 2 段に描く深鉢（5）がある。関東地方では見られない、在地的に変化したものも多い。大木 9 式系の土器（9）は、東北南部から新潟県を經由して北信地方に伝わったものである。波状口縁に手の込んだ突起が 4 個立ち上がり、胴上半部に沈線や低い隆帯

で大ぶりの渦巻文を描く。下半部は縦長の逆 U 字状文や区画文など、加曽利 E 系と折衷したものが多く、加曽利 E 系とともに多いのが、隆帯上に押圧を施す圧痕隆帯文土器・坪井類型（6）である。平口縁の単純な器形に隆帯を貼り付け、口縁部には横位の蕨手文を 3 単位配し、胴部では縦位に垂下する。北信地方独特の在郷土器で、上越地方にも広がるが、他の地域では見かけない。4・7 の隆帯にも押圧や刻みが施されているが、圧痕隆帯文土器からの影響であろう。

これらの主要 3 系統以外は量が少ないが、中信唐草文土器 IV 期の土器（7・8）が一定量混じる。口縁部に横位、胴部に縦位の隆帯を貼り付け、広く浅い凹線（7）や短沈線（8）を地文とする。他の系統が地文に縄文を施すのと対照的である。さらに少数の土器として、北陸系の串田新式土器（10）がある。4 山の波状口縁を、円形押圧を施す細めの隆帯が横位区画し、この間に弧状沈線を充填し、胴部には縄文を施す。北陸や糸魚川方面からの搬入品ではないように思う。北信地方では、串田新式の波状口縁を模倣したと思われる大波状口縁土器や、加曽利 E 式と似るが、口縁部に数多く渦巻文が巡る多連渦巻文土器といった、少数派の在郷土器も作られている。

このほかに、一対の把手が付く両耳壺が相当量ある。注口付鉢（11）と、口縁部をめぐる罫に孔があく小型壺（12）はごく少数であるが、後期に土瓶形の注口土器へと変遷を遂げる器種である。

後期前半土器（図 9 - 13～28）は、初頭の称名寺式から中葉の加曽利 B2 式頃まで連続している。堀之内 1・2 式に並行する「ひんご 1・2 式」については、明専寺遺跡の項でふれることとし、ここでは図示した土器の時期と分類だけ述べる。長野県で堀之内 1 期には、文様意匠を描く精製土器には深鉢形は少なく、大部分が金魚鉢のような形の鉢形土器（13）である。口頸部を無文とし、胴部に渦巻文を描く。深鉢形は、新潟県の南三十稲場式が伴う。堀之内 2 式期には、この種の鉢形土器が継続し、体部屈曲鉢（14・15）が現れる。

朝顔形深鉢(16)も増加する。この時期の南三十稲場式(17)は北信地方でもまれである。新段階には石神類型(18・19)が有文精製土器の主体を占めるらしい。加曾利B1式期には、関東地方とほとんど変わらない有文精製土器(20・21)に変わり、地方色が薄らぐ。これを模倣したミニチュアに近い土器(27)もある。

堀之内1・2式から加曾利B1式期には、中部・関東地方で注口土器が数多く作られた。22は完形の注口土器である。比較的小型で、器高に対して底径が大きい、すわりのよい器形である。胴上半部の側面に三角状の意匠と、これを囲む懸垂文を太い沈線で描き、細めの蛇行沈線を加える。一对の橋状把手と注口部にも弧状沈線を重ねる。口縁部に沿って円形刺突文を施す。焼成は甘く、図版2-14の右側面は器面が剥落している。堀之内1式期である。25は大型である。23とともに堀之内2式後半と思われる、注口土器に独特の文様を描く。24は加曾利B1式期の注口土器で、頸部が立ち上がっている。

### (3) 成果の利用と研究の進展

北信地方の中期後半土器様相 中・南信地方では中期後葉の唐草文Ⅱ段階、曾利Ⅱ式期に遺跡数が最多となる。中期後半土器の地域差も早くから指摘されてきた。松本盆地から木曾地方、上伊那地方には、大柄渦巻文に矢羽状沈線を施した樽形深鉢を特徴とする、中信唐草文土器が分布する。下伊那地方には、中信とは異なる特徴を持った下伊那唐草文土器が現れる。諏訪地方には、山梨県から南関東に分布し、八ヶ岳西南麓を中心に広がる、条線文を地文とする曾利式土器がある。

東・北信地方ではこれに遅れて、中期末葉にかかる加曾利EⅢ式期に急速に遺跡数が増える。1990年代の上信越自動車道建設に伴う大規模縄文時代集落の調査で、千曲川流域の土器様相が鮮明になった。千曲川下流域の北信地方では、千曲市屋代遺跡群(長野県埋蔵文化財センター2000b、以下「県埋文」という。)の成果から、関東系の加曾利EⅢ式土器、東北系の大木9式土器が変容し

た土器、土着的な圧痕隆帯文土器が組成をなし、折衷した土器も見られる。千曲川上・中流域の東信地方では小諸市郷土遺跡(県埋文2000a)の成果から、加曾利E式と似た口縁部・胴部の構成でうろこ状に沈線を充填する郷土式土器が設定された。

これらの調査成果が世に問われる以前、筆者は卒論の中で小野遺跡の土器群から、北信独自の圧痕隆帯文土器の存在に気付き、県南の土器群と比べて誠に印象が薄い千曲川流域の土器群に関心を寄せてきた(綿田1983・1988a・1999・2003a・2007・2008)。

地域色豊かな中期後半土器群 屋代・郷土遺跡報告書が刊行された2000年、長野県全域の縄文中期土器様相が見渡せるようになった。遺跡数が最も多い中期には土器の形態・文様・器種の地域色が顕著となり、前半期に4つほど、遺跡数が最多となる後半期には5つほどの地域に区分できる。各地域では、住居形態や施設、土偶、石器組成などにも差が現れる。縄文中期後半の地域区分は現代の方言区画に通ずる部分が多く、注目している。おそらく大河川に沿って連なり、三方を山に囲まれた小盆地ごとの環境に適応した、縄文時代以来積み重なってきた文化が、時代を超えて継承されてきた結果と想像している(綿田2012a・2013b)。

縄文後期注口土器の文化財指定 昭和62(1987)年5月19日、指定名称「注口土器」1点が有形文化財となった。縄文土器の中で数少ない器種が、無傷の完形で出土したことが評価されたい。

縄文セミナーで後期注口土器を取り上げた際、筆者が長野県の事例を集成したので(綿田2015)、全体がわかる図化個体を抜粋して図示する(図10-1~50)。図中の配列は、1・2が中期末葉から後期初頭の注口付浅鉢、3・4が小型壺、5~7が後期初頭の注口土器、8~14が後期前葉堀之内1式期、15~32が堀之内2式期で、おおよそ15列が古く、27列が新しい。33~37は後期中葉加曾利B1式期、38~43は加曾利B2・3式期、44~50は後期後葉から末葉の曾谷~安行1式期頃であ

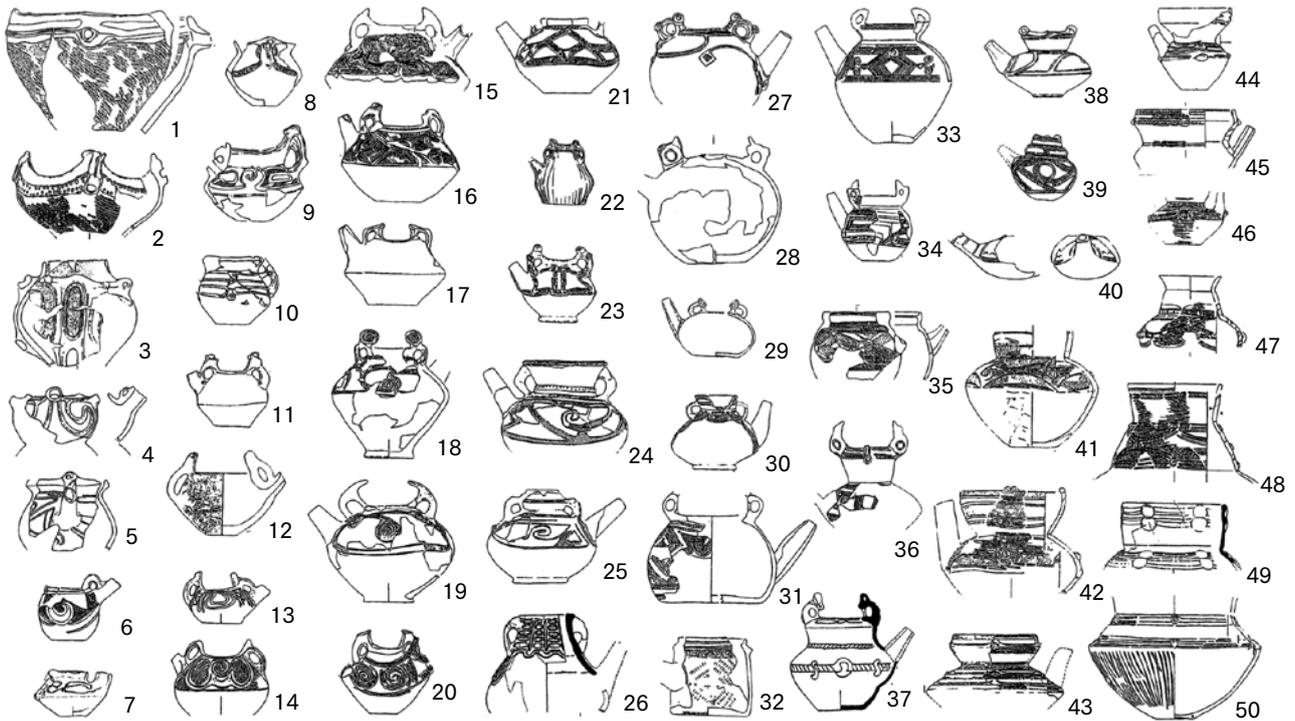


図 10 長野県出土縄文後期注口土器(1:12)(綿田2015から抜粋)\*1~4は注口付浅鉢形・壺形土器

1屋代, 2鴨田, 3唐沢岩陰, 4郷土, 5坪ノ内, 6三田原, 7加賀田, 8・9八幡裏, 10東畑, 11梨久保, 12原, 13小野, 14・29栗林, 15・18・19湯倉洞窟, 16目切  
17御堂垣外, 20・22千鹿頭社, 21花上寺, 23~25村東山手, 26十二ノ后, 27・40石神, 28若下, 30吉田古屋敷, 31他谷, 32八千原, 33北村, 34・44大安寺  
35・36成立, 37徳久利, 38・39東原, 41・42・45~50中村中平, 43中越

る。13は小野例であるが、堀之内1式期の完形個体は少なく、全体の中でも比較的小型の個体であることがわかる。

注口土器は、中期末葉の注口付浅鉢と小型壺から変化して後期初頭の終わりに土瓶形が成立し(鈴木徳 1992), 前葉から中葉に多く見られる。きわめて精製度が高いものには、搬入品も含まれている可能性がある。中葉後半から末葉には、深鉢・浅鉢形土器は上ノ段式・中ノ沢式といった長野県在地の土器型式に属するものであっても、注口土器は自給だけではなく、かなりの比率で東北系の瘤付土器や、中部以西の縁帯文・凹線文系の注口土器の模倣品や搬入品が占めるようになるらしい。

注口土器は、液体を注ぎ分ける機能を持つことは疑いないが、それを受ける器が伴った例は極めて少ない。県内では、東御市加賀田遺跡8住でミニチュア土器が傍らから出土した事例のみであろう。用途がうかがえる出土例もない。土瓶といえは水を入れて火にかけ、湯を沸かす器であるが、縄文時代の注口土器には一般的に被熱痕跡は見ら

れない。

標高1400mの群馬県境の山岳洞窟、高山村湯倉洞窟遺跡の事例を示す(綿田 2013a)。この洞窟は縄文草創期から中世まで利用され、古墳時代までは狩猟拠点となった。主にシカ、イノシシ、クマ、カモシカなどの大型獣を捕獲し、獣骨出土量は全国の洞窟遺跡で最多といわれる。堀之内2式期土器は有文土器が3分の2を占め、その中で注口土器は26.5%に上った。比較例として、平地にある長野市村東山手遺跡から同時期の敷石住居跡3軒を選んで集計したが、注口土器が多い住居を含んでいたものの、18.7%であった。専門的に狩猟活動を営んだ湯倉洞窟の環境から推定すると、マガギの狩猟期の禁忌や儀礼に準えれば、例えば動物血など液体を注ぎ分けて共食する儀礼、成人ハンターとしての通過儀礼などの場で用いられた器と想像する。日常普通にする器ではなからう。

縄文後期の華燭土器 図11-17~20は小野遺跡, 21は明専寺遺跡出土の後期中葉土器である。これらは東北地方一円に分布する、「華燭土器」(鈴

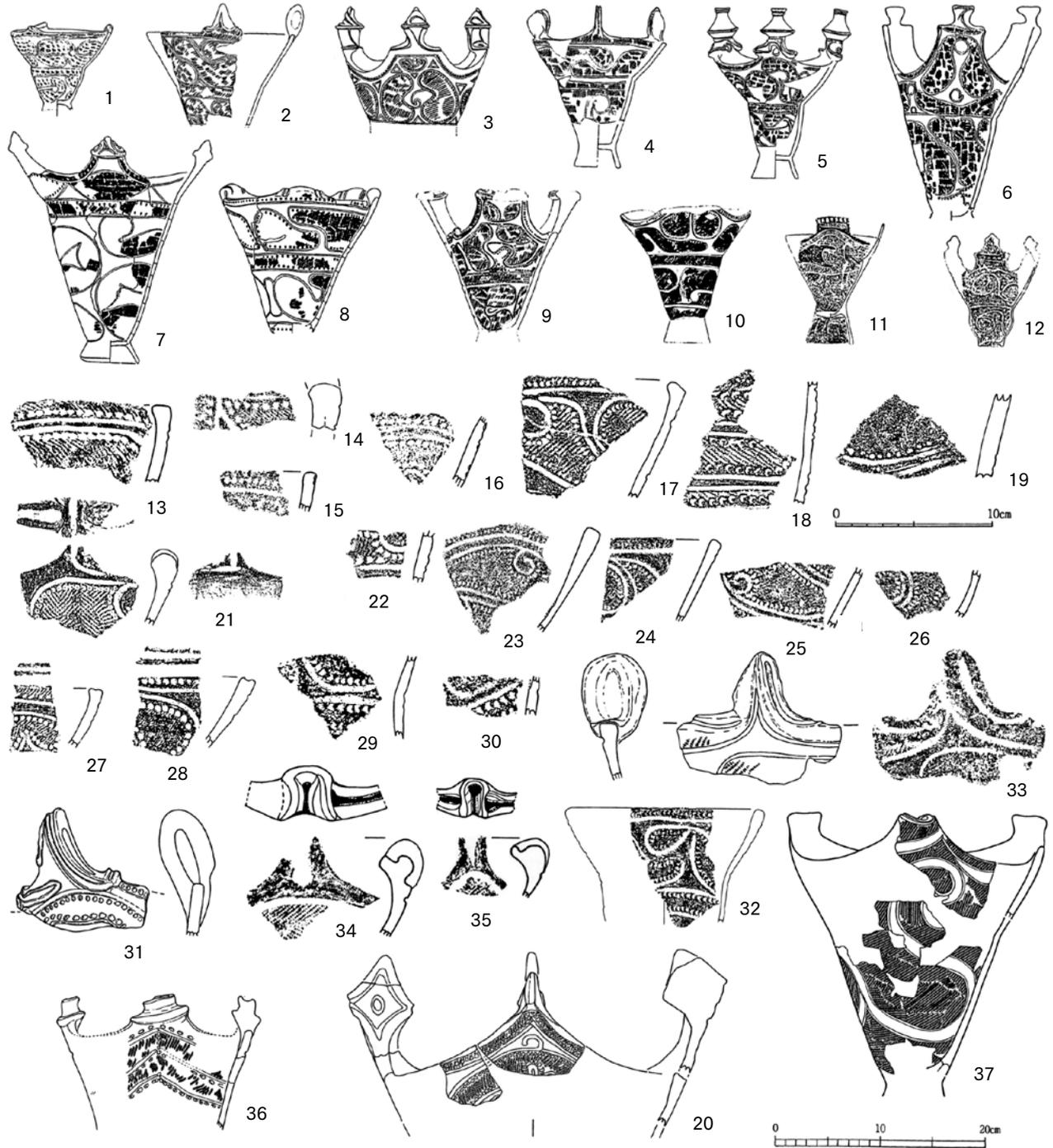


図 11 縄文後期東北地方華燭土器（1:12、鈴木克 2004 から抜粋）と長野県出土例（1:4、1:6）

1青森・小田内沼. 2・3岩手・長倉1. 4~6秋田・大湯. 7・8山形・渡戸. 9同・かっぱ. 10福島・番匠地. 11・12同・愛谷. 13岡ノ峯. 14~16千田. 17~20小野  
21明専寺. 22~26吉田古屋敷. 27~32吉田町東. 33猪平. 34・35深町. 36古屋敷. 37岩下

木克 2004) のうち、B 類土器の仲間である。形態の特徴は、胴部が筒形か、上部が外湾して開く台付深鉢で、口縁部に多様な形態の大形突起が 3 単位付く。文様は雲形状など曲線的な意匠を磨消(充填)縄文で描き、口縁部や文様意匠を刺突列で縁取るものが多い(図 11 - 1 ~ 12)。東北地方では、北部の十腰内 2 式、中部の宮戸 2a 式、南部の宝ヶ

峯式などの限られた時期に出土するという。

卒論作成時には皆目わからず、提出後の 3 月に偶然東北地方の土器とわかった思い出深い土器のため、関心を持っていた。これまで隣県で数回見かけた程度であり、長野県より東側でもめったに出土しない土器と考えていた。小野遺跡の報告書で、笹澤先生が初めて県内出土例を図示されたこ

とは画期的である。今回筆者の知見に上った県内 10 遺跡 25 点を図示した (図 11)。すべて千曲川流域の遺跡で、下流側は野沢温泉村、上流側は小諸市の間に分布している。出土状況から華燭土器が埋没した時期を推定すれば、小諸市三田原遺跡 117 号土坑 (県埋文 2000a) では、華燭土器以外は加曾利 B1 式であった。長野市吉田町東遺跡 (長野市教委 2010) では、報告書掲載土器はほとんど加曾利 B1 式だけである。

長野市内で隣接する吉田古屋敷・吉田町東遺跡の集中度は高い。いずれも弥生時代以降の遺構に攪乱されて、縄文遺物は極めて断片的であるが、これだけ出土している。小野遺跡でもおそらく複数個体が出土している。図示した資料のほかに、東北系土器は報告されていない。同時期の周辺遺跡も含めて見落とされた資料がないとすれば、華燭土器だけを選択して特定の交通手段を使って遠隔地に搬入し、特定の集落が受け取っていたと推定することも不可能ではなからう。長野県から東北地方まで、数百 km 程度離れた地域間同士、あるいは集落同士の交通関係を探る足掛かりになりはしないだろうか。膨大な資料探索や土器の胎土分析など、課題と作業は尽きない。このような資料の発見第 1 号、第 2 号が飯綱町内の遺跡であったことは強調しておきたい。

## 5. 明専寺遺跡の敷石住居と縄文後期土器

[図 12～17, 図版 3・4]

### (1) 調査の概要

明専寺遺跡は、飯綱町 (旧牟礼村) 大字柳里 20 番地に所在する。昭和 54 年度県営圃場整備事業に伴い、記録保存を目的として発掘調査された。事前に行った施工範囲の埋蔵文化財分布調査によって、新たに発見された遺跡である。発掘調査は、昭和 54 (1979) 年 7 月 28 日～8 月 10 日、茶磨山遺跡と並行して行われた。調査面積は記載されていないが、グリッド設定部分の面積は、明専寺・茶磨山遺跡ともおよそ 1,000 m<sup>2</sup> である。報告書は翌 1980 年 5 月に刊行された (牟礼村教委 1980)。

明専寺・茶磨山遺跡は、南西から北東に流れる八蛇川沿いに立地する (図 18)。飯綱山から流れ出る滝ノ沢を源流とする支流と八蛇川本流に挟まれ、茶磨山遺跡は八蛇川を挟んで対岸に位置する。ともに河川によって深く浸食され、独立した丘陵状の微高地となっている。両遺跡とも湿田であった。地山をなすローム層の上に堆積している黒色土層の中には、長径 1m を超す礫が含まれ、細かい礫が見られず、地形の傾斜が強いことから、付近一帯が地すべり地の可能性がある。調査地点の標高は、明専寺遺跡が 574～576m、茶磨山遺跡が 571m 前後である。

検出した遺構は、竪穴建物跡・敷石住居跡各 1 軒、土坑 3 基であった。出土した土器の時期は、縄文後期初頭・前葉・中葉、晩期中葉で、後期前葉が最も多い。石器の数量はすべて記載されていないが、報告書から打製石斧 9 点、磨製石斧 19 点、石皿 2 点、凹石 15 点以上、磨石 1 点以上、玉斧 1 点、大珠 1 点、研磨礫 3 点が確認できる。

### (2) 遺構と遺物

竪穴建物跡と敷石住居跡 遺構遺物包含層である黒色土の中には非常に礫が多く、これを取り除いて遺構検出した。J1 号竪穴住居跡 (図版 3-19・20) は、東西・南北とも 6m の円形プランである。壁線に近い位置にピット 8 個が巡る。中央より北西側に、6 個の礫を用いた楕円形状の石囲炉がある。遺物は少なく、図化した土器は晩期中葉の浅鉢形土器 1 点 (図 13-3) である。このため遺構は晩期に帰属する可能性があるが、周辺から出土した土器は圧倒的に後期前半が多く、ほぼ晩期のみ茶磨山遺跡があるため、時期決定は保留している。

J2 号敷石住居跡 (図版 3-17) は、柄鏡形敷石住居である。長径 4.6m、短径 3.6m を測り、主体部はほぼ円形である。南側に張出部がある。壁際に 4 個の支柱穴がある。石囲炉が中央よりやや北寄りにあり、炉内に土器の底部 2 点を重ねて埋設している。強い二次焼成を受け、外側の土器は砕けて復元できなかつた。炉の周囲には滑らかな

平石を敷き詰めている。これ以外の石はローム中にしっかりと埋まっているものである。奥壁と炉の間から、ミニチュア土器（図13-2）と、大珠の欠損品（図14-3）が出土した（図版3-18）。その他の遺物は炉付近に多く、南側からは出土していない。土器は少量であるが、図13-1から堀之内1式の新しい時期に帰属する遺構と考える。石器には、磨製石斧7点、凹石15点、槌石1点がある。

鉢被葬の墓 北拡張区から、頸部の屈曲部から上を欠損した堀之内1式新段階の鉢形土器（図13-4）を逆位に埋めた遺構が見つかった（図版3-21）。人骨との鑑定は受けていないが、土器内から骨片が出土したので、土坑墓の遺体頭部に土器を被せた鉢被葬と考えられる。長野県と隣接地域で後期前葉に見られる葬法であるが、墓群中の数%から10%以下程度に見られる葬法である。鉢被葬を行う理由はわかっていない。頭部に被せる土器には深鉢は少なく、明専寺例のような鉢や浅鉢を転用する。

後期前半の土器群 多くの土器が、遺物包含層から出土している。ふれあい館に常設展示されている土器（図15-28～31、図版4-25～28）も含めて、変遷を概観する。図13-17・18は後期初頭の称名寺式後半の土器である。円形刺突文を充填した三十稲場式もある。後期前葉土器（図13-1・4～6・10～22、図15-28～31）のうち、1・4～6・10～15・18・19・28は、堀之内1式期に属す。4・5・11～15は、小野遺跡出土の図9-13のような口頸部無文の鉢形土器で、胴部に渦巻文を描く。10は同種の文様を描く浅鉢である。1・18・19・28は深鉢形である。口縁部に4単位配した渦巻文や凹点の間に沈線が巡り、斜めの短沈線が沿う。胴部には3条ほどの沈線で米字状や水字状の意匠を描く。28は縦位の沈線が下端で緩い弧状となるが、全体がH字状の意匠となる。

16・17・20～22・29～31は堀之内2式期で、16・17は鉢形、20・21は朝顔形深鉢、22は新しい段階の石神類型である。29・30は体部屈曲の深

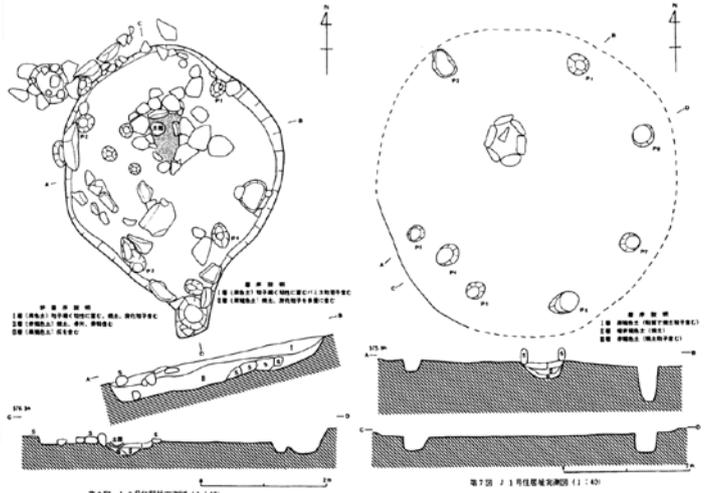
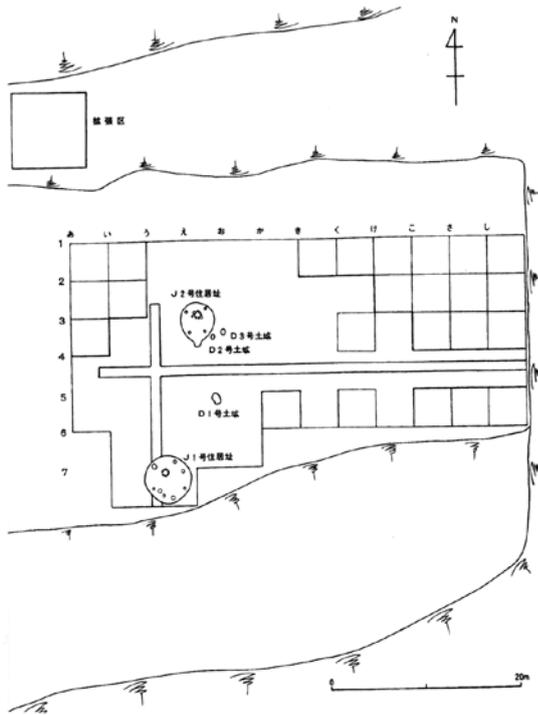
鉢（29）と鉢（30）である。ともに沈線を重ねて三角形・菱形・長方形などの意匠、幾何学文を描き、古い段階に属す。31は内屈する上半部に三角文が巡る、小型の鉢である。23～27は中葉の加曾利B1式で、23は口縁部内外面に沈線帯がある深鉢形、24は鉢形、25～27は注口土器である。

土製品と石製品 図141-2は土偶である。1は沈線と縄文でパンツ状の衣服を表現した胴下部で、膨らんだ腹部には縦位の刺突列を施す。2は長さ11.3cmを測る大型の足である。中空で下部に孔があり、つま先に6か所の刻みを施して指を表現する。6は凝灰岩製の大型の足で、孔の部分で欠損する。4は硬玉製の玉斧で、刃部をすり減らしている。5は真珠岩を扁円形に整形したもので、玉類の未製品であろうか。

### (3) 成果の利用と研究の進展

縄文後・晩期の住居跡 柄鏡形（敷石）住居は、関東地方を中心に現在全国で1,250遺跡以上が知られている（山本2002）。柄鏡形（敷石）敷石住居の起源は、中期後葉の出入口部埋甕の石蓋と、炉辺や奥壁の石壇・石柱に敷設された石敷が拡大し、中期末葉に敷石住居が成立した。中期後葉の埋甕と石壇・石柱は長野県の中・南信地方、唐草文土器と曾利式土器の分布圏に多く、柄鏡形（敷石）住居出現のルーツに深く関わる地域である。全面敷石より部分敷石の事例が多く、長野県では石がない部分に板を敷いた住居跡も見つかっている。敷石住居は、長野県では後期前葉に盛んに作られ、石を敷かない堅穴建物を上回る。特に遺跡数が多い堀之内2式期の事例が目立つ。5年ほど前に調べたところ、簡略な文章記録だけが残る例も含めて、県内では146遺跡が確認されている。地域的には、浅間山麓の北佐久・上田小県地域と、八ヶ岳西南麓の諏訪地域に多い（綿田2017a）。

県内で検出された縄文晩期の堅穴建物跡は、今日でも50軒に達しないのではなかろうか。千曲市（旧戸倉町）円光房遺跡では円形プラン、関東に近い小諸市石神遺跡では方形プランの晩期前・中葉の堅穴建物跡が検出されている（綿田2012b）。



J2号敷石住居跡

J1号竪穴住居跡

図12 明専寺遺跡全体図(1:800)・遺構(1:120)(牟礼村教委1980)

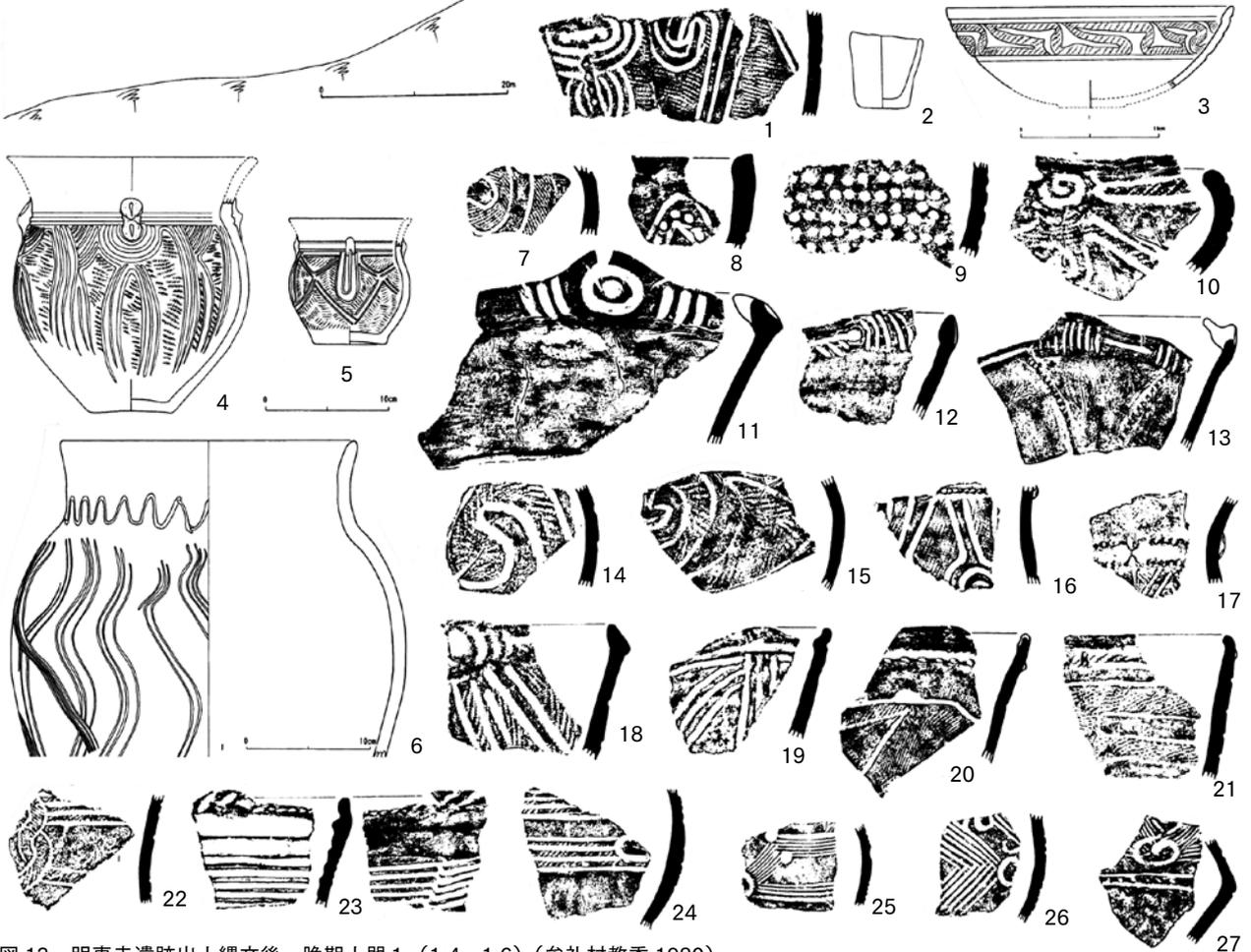


図13 明専寺遺跡出土縄文後・晩期土器1 (1:4、1:6)(牟礼村教委1980)

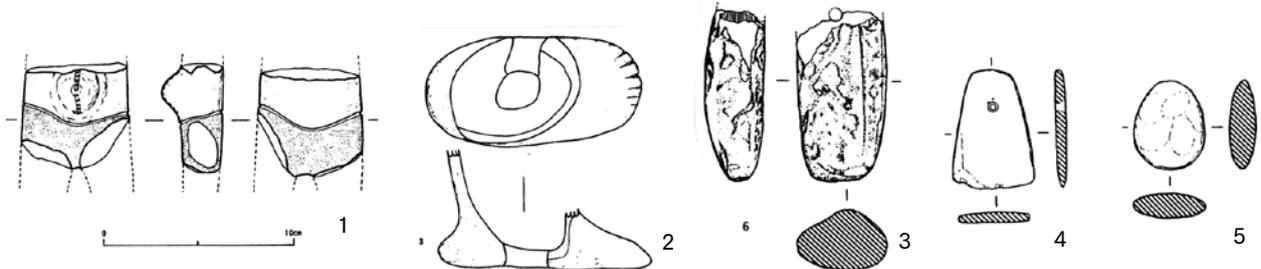


図14 明専寺遺跡出土土製品・石製品(1:4)(牟礼村教委1980)

1・2土偶, 3~5玉類

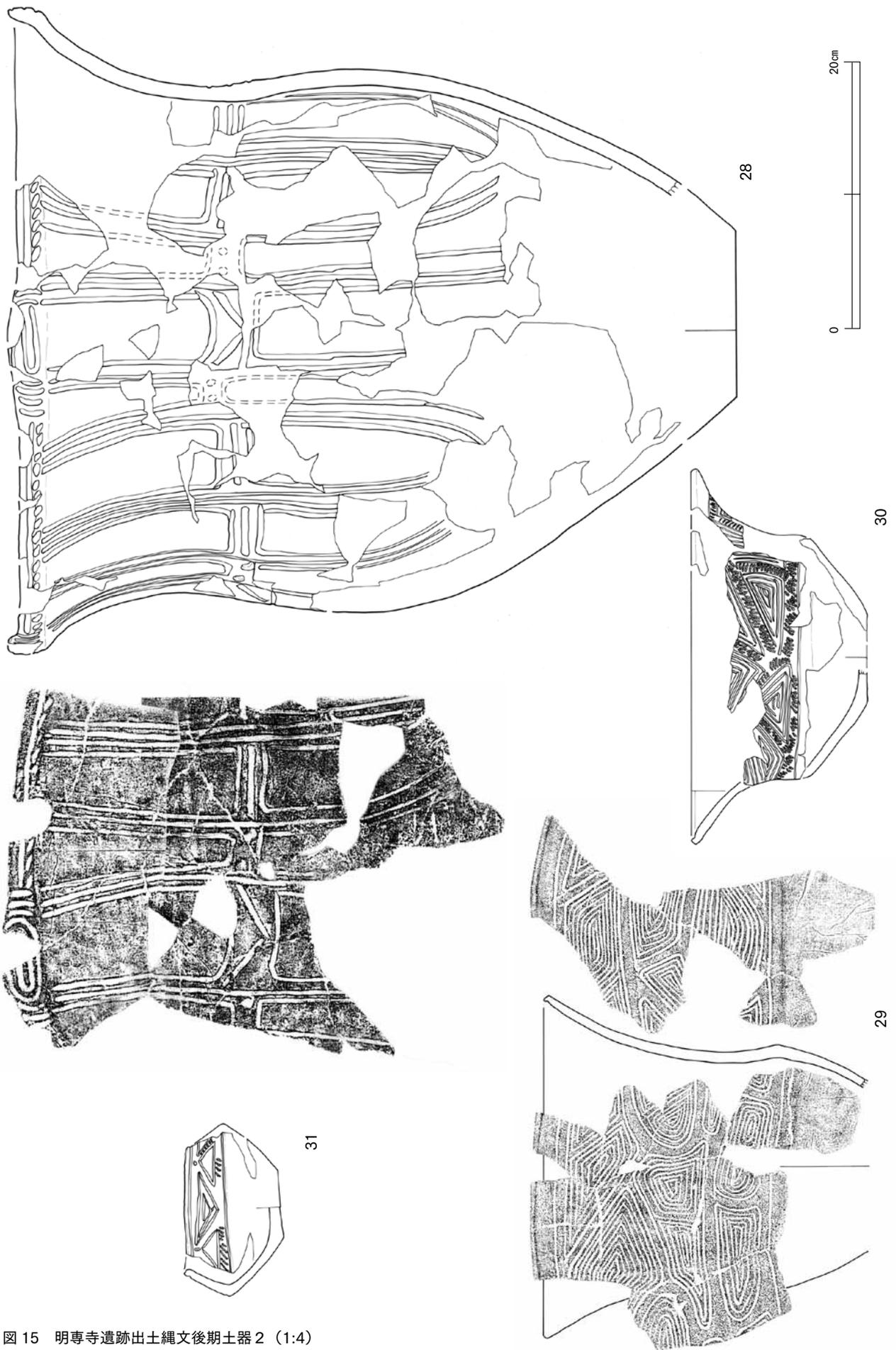


图 15 明専寺遺跡出土縄文後期土器 2 (1:4)

J1 号竪穴住居跡が晩期とすれば希少な例となる。

縄文後期前葉の「ひんご1・2式土器」筆者が卒論に取り組んだ頃から、長野県の堀之内1・2式期土器は、口頸部を無文とし、屈曲部下の丸みがある胴部に文様を描き、縄文を充填する鉢形土器が多数を占め、深鉢主体の関東地方との違いが判明した(綿田1985・1988b)。しかし標式となる好適な遺跡がなく型式命名を控えてきた。近年栄村ひんご遺跡報告書で同式を提唱した(鈴木徳2018, 県埋文2018, 綿田2021)。

ひんご1式(図16-1~15)は、茂沢類型の伝統を引く前述の鉢形土器が主体となり、胴部には下端を横位に連繋した渦巻文を描く栗林類型(1~9)が代表的である。胴部文様には渦巻文を中心に配し、湾曲した三角・楕円状の縄文施文部が左右から囲むA類(1~5)、渦巻文間を斜行文が連結するB類(6~9)がある。後半には、数条単位の沈線で下端開放の懸垂形態文様を構成する、小仙塚類型(10・11)が増加する。これらに、南三十稲場式古段階の十三本塚北類型の深鉢(13~15)が伴う。長野県では本類型は少数派ながら、佐久・諏訪地方まで広く分布する。

ひんご2式(図16-16~32)にも栗林類型・小仙塚類型の鉢が相当量継続する。1式期に比較して、口縁部文様の狭小化・消失、口頸部の拡大、胴部の無文化が進行する。前半期には体部屈曲鉢(28・29)と、これに似た深鉢(30・31)がある。古段階に少なかった朝顔形深鉢(20)が中段階以降増加する。これと近似するが口縁部の外傾が乏しい、直胴状の円筒形深鉢(21~23)が特徴的である。北信では南三十稲場式新段階の元屋敷類型が散見される。新段階には石神類型が発達し、林中原形深鉢(32)に由来するひんご遺跡のA器形(33・34)と、円筒形深鉢からのB器形(25~27)がある。同種の文様を描く蓋もある。ひんご1・2式を通じて長野県では多量の無文粗製土器が伴う。

ひんご1・2式は、編年位置は堀之内1・2式と並行すると考えている。ここまで堀之内式編年で

時期区分してきた小野遺跡、明専寺遺跡の後期前葉土器群も、図16と上記の説明に対応する内容を備えた、長野県に特徴的な土器群である。飯綱町は北信でも新潟県上越地方に近い位置にあるため、ひんご1式期の新潟県の土器について少し補足する。柏崎市十三本塚北遺跡(図17, 柏崎市教委2001, 品田2002)では、長野県に特徴的な栗林類型(B群鉢形1~6, 深鉢形7~12)と、遺跡名からとった十三本塚北類型(CII群 $\alpha$ 系19~22,  $\beta$ 系23~27)が共存し、後者が多数派を占める。B群の鉢形は栗林類型B類である。長野県では少ない深鉢形は、新潟県ではより多い。深鉢形のCI群は新潟県から東北地方に連なる種類で、長野県には分布しない。CII群 $\alpha$ ・ $\beta$ 系の深鉢形は長野県では少数派ながら、栗林類型などの鉢形と安定して組成をなし、ひんご1式を構成している。明専寺遺跡の図15-28は、十三本塚北遺跡の図17-23と同系列に分類されるものである。これほど大型の土器で全体形がほぼわかる南三十稲場式の個体は、長野県では現在唯一であろう。

## 6. 茶磨山遺跡の縄文晩期土器と「第二の道具」〔図18~21, 図版3・4〕

### (1) 調査の概要

明専寺遺跡と並行して発掘調査し、報告書も1冊にまとめてあるため、前項に譲る。遺跡の所在地は、飯綱町(旧牟礼村)大字川上1,666番地である。昭和54(1979)年発掘調査時には「茶白山」の標記であったが、牟礼村教委による平成8年度発掘調査の報告書(牟礼村教委2000)では、小字の標記と合わせて「茶磨山」遺跡に変更されている。本稿では昭和54年発掘の成果を紹介するが、標記は変更する。

調査地点は南から北に向かって緩やかに傾斜する斜面上に立地している。東西はいずれも地山が上がっており、遺跡全体が大きな凹地状を呈していた。特に遺物が集中した地点は、台地が切れる調査区北西部で、黒色土の落ち込みが顕著であっ

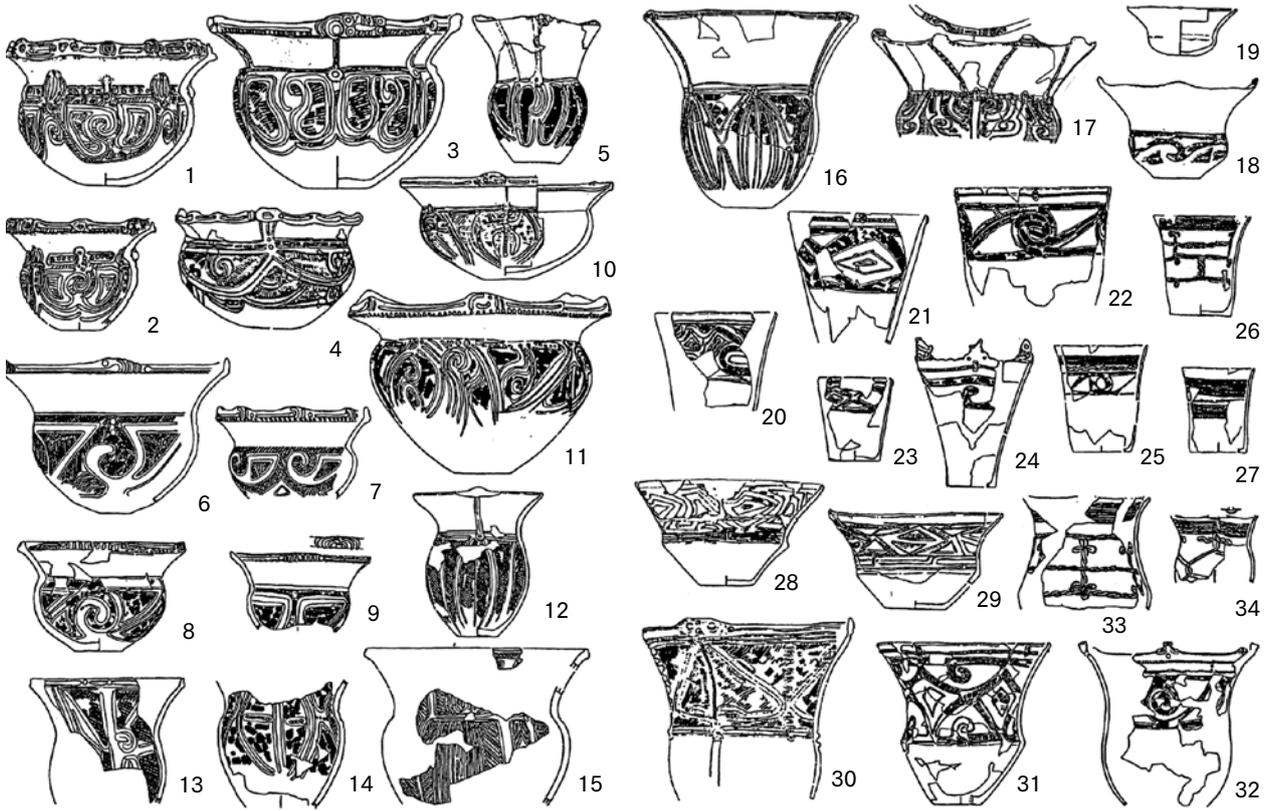


図16 ひんご1式(1~15)・2式土器(16~34)(1:12)(綿田2021から抜粋)

1和中原, 2宮, 3下ノ原, 4・18梨久保, 5北村, 6・7栗林, 8・9・14・19・21~27・32~34ひんご, 10久保田, 11古屋敷, 12・13・15岩下, 16・20滝沢, 17村東山手  
28・29八千原, 30成立, 31湯倉洞窟

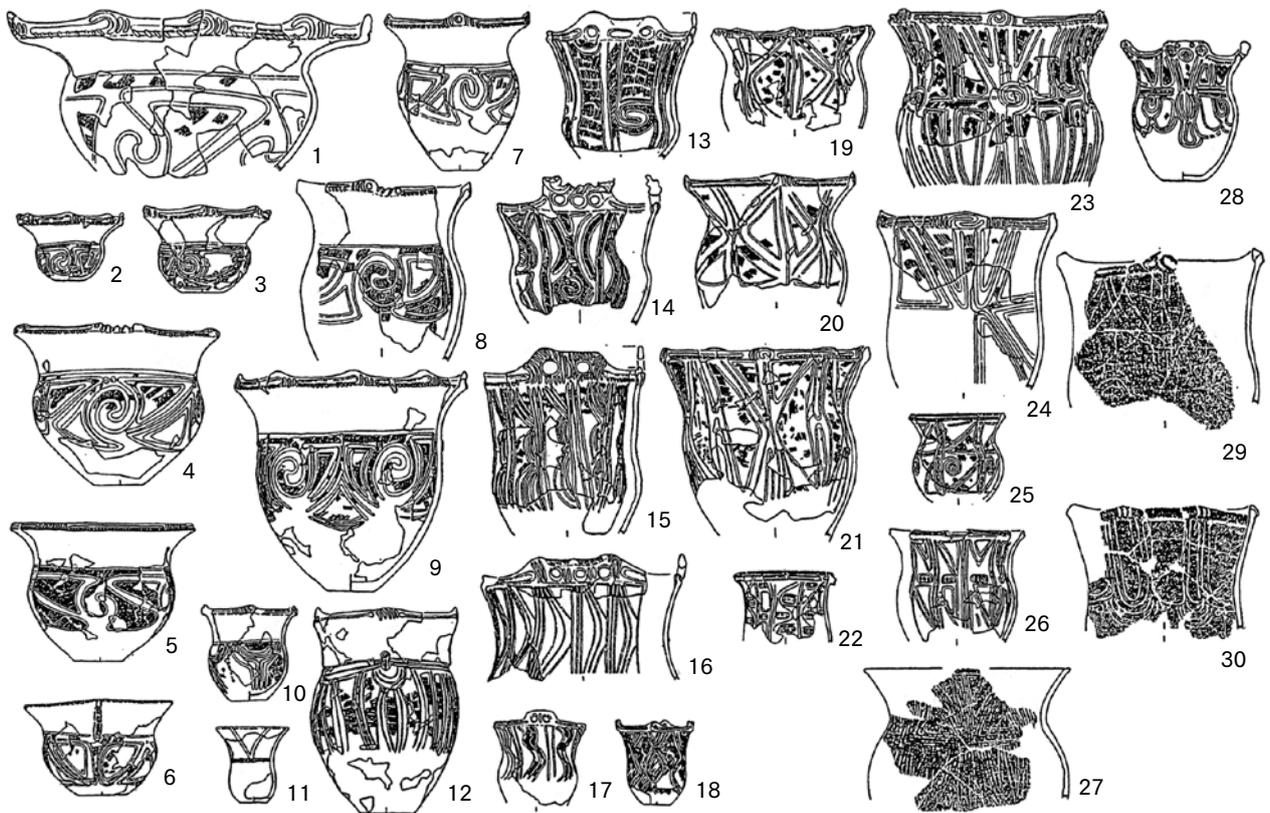


図17 新潟県柏崎市十三本塚北遺跡出土縄文後期前葉土器(1:14)(品田2002から抜粋)

B群鉢形, 1~6・深鉢形, 7~12 C I 群, 13~18 C II 群 α 系, 19~22・β 系, 23~27・γ 系, 28~30



明専寺遺跡昼休みのひととき

たため、平面的にプラン確認を試みたが困難をきたした。そこでトレンチ掘削による層序確認に変更したが、大雨により一夜にして凹地は水没し、この雨水のため遺物の層位的な取上げを不可能にした(図版4-24)。遺構は検出されず、グリッド単位の遺物採取という調査となった。

遺物は少量の縄文後期後葉・末葉の土器を除き、晩期前葉・中葉の土器群である。報告書からわかる石器は、石鏃107点、打製石斧3点、磨製石斧9点、スクレイパー1点、石匙1点、磨石3点以上である。土・石製品は土製耳飾6点、土偶2点、石冠2点、独鈷石1点、石刀3点である。遺物量は正確に表現できないが、明専寺遺跡の2倍程度出土している。

## (2) 遺構と遺物

縄文晩期の土器群 報告書刊行後の再整理によって復元され、ふれあい館に展示されている土器も含めて概観する(図19-1~28, 図21-29~31, 図版4-29~31)。5・6は羽状沈線文を施し、後期後葉の上ノ段式土器であろう。7は疎らな羽状沈線、8は肥厚する口縁部で、末葉の中ノ沢式土器であろう。1~4・9~28は、晩期前葉から中葉土器である。1~21はいわゆる亀ヶ岡系土器である。9~15は搬入された土器、16~21は模倣された土器である。6は羊歯状文を施す壺形土器、10・11は内面に三叉文風の沈刻を施した鉢形土器で、皿形の5とともに大洞BC式である。13~15は雲形文を施す大洞C1式の皿型か浅鉢形土器である。16は羊歯状文を施す大洞BC式期の壺形土器、17~21は雲形文を模倣し

た大洞C1式期の鉢形・壺形土器である。本来の規格を留めるものと、完全に崩れたものがある。

1・22~28は在地の佐野式土器である。1は完形で、磨消縄文で三叉文が強調された渦巻文を施す。22・23は三叉文を施す佐野I a式、24・25は鍵の手文を施す佐野I b式土器である。26はそれらに伴う、口縁部に数条の沈線が巡る粗製的な土器である。27・28は粗大な工字文を施す、佐野II式中段階の土器である。2は台付土器の脚部である。3は有文、4は無文の浅鉢形ミニチュア土器である。

29~31は浅鉢形土器である。29・31は口縁部に縄文を施し、29は下端を刺突文帯で区画し、渦巻文に三叉状の彫去を加え、磨消縄文を交える。口唇部に彫刻を施す小突起がある。31は縄文帯で横位区画し、沈線1条の襷掛け状沈線文を描く。内面に部分的に彫塑文様を施す。30は縄文がなく、沈線1条で横位区画31と同じ入組文と波状沈線文を施す。これらは佐野I b式からII式古段階に位置するものであろう。このような器形・文様の土器は、標式となった山ノ内町佐野遺跡などには少なく、新潟県上越市(旧中郷村)籠峯遺跡(中郷村教委1998)に類例が多い。襷掛け状入組文は北陸地方の中屋式で多用される文様である(酒井2008)。

「第二の道具」土偶と、石冠、独鈷石、石剣 食料煮炊きや貯蔵に用いる土器、狩猟具の石鏃、木を切ったり加工する磨製石斧、製粉具の磨石と石皿のような実用的な道具とは別に、現代人が見ても実用の役に立つとは思えず、何に使うものか見当がつかない土・石製品を、「第二の道具」と呼ぶ。

茶磨山遺跡が営まれた縄文晩期前半は、形を見ても得体が知れない土製品・石製品が盛行する時期で、見出しに示した道具が出土した(図20-1~11)。1は土偶の頭部で、目鼻が狭くまとまり、口が離れている。両耳に耳飾の表現がある。2は胴部で、乳房の表現はあるが、残存部は平板な作りである。3~5は白形の耳飾で、5は中央に小

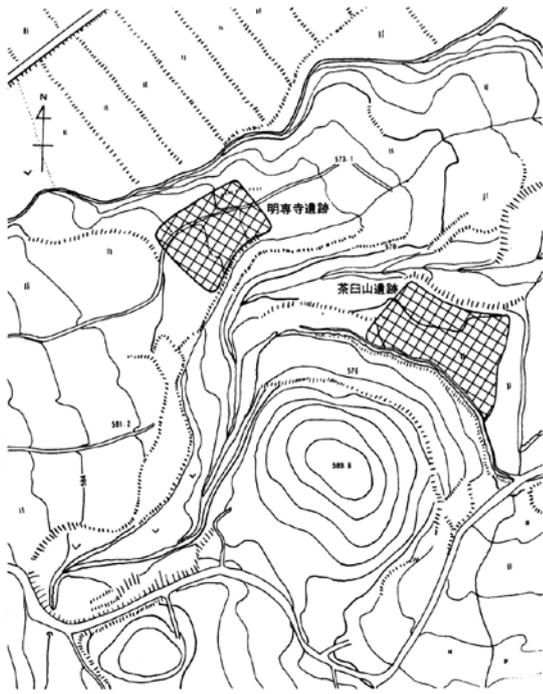


图 18 明専寺・茶磨山遺跡周辺地形と発掘調査区  
(1:500) (牟礼村教委 1980)

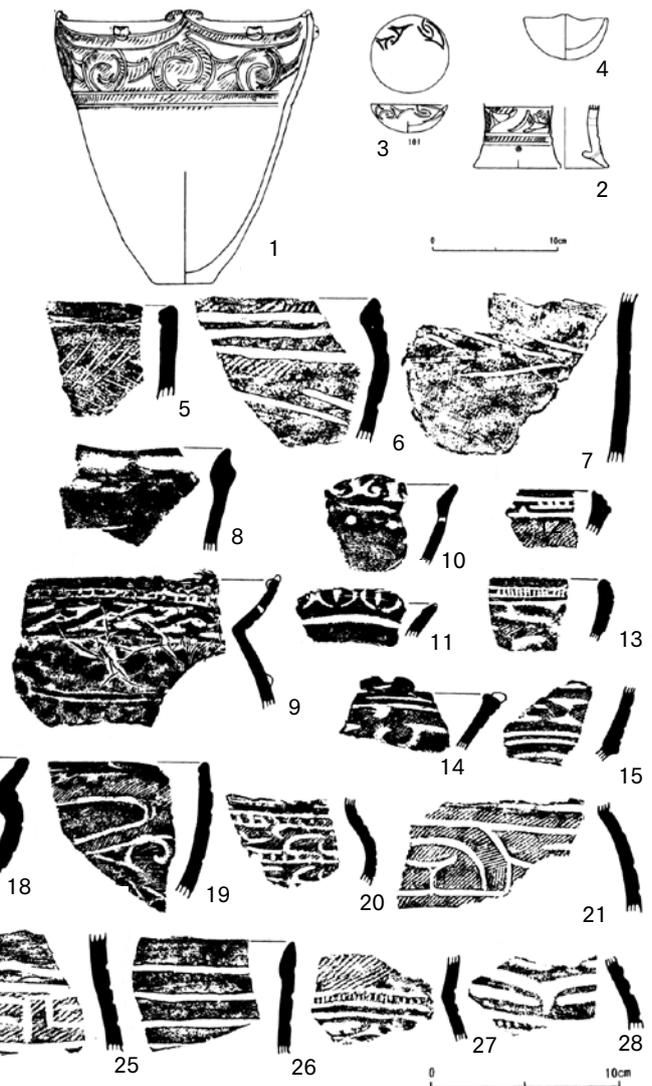


图 19 茶磨山遺跡出土縄文晩期土器 1 (1:4、1:6) (牟礼村教委 1980)

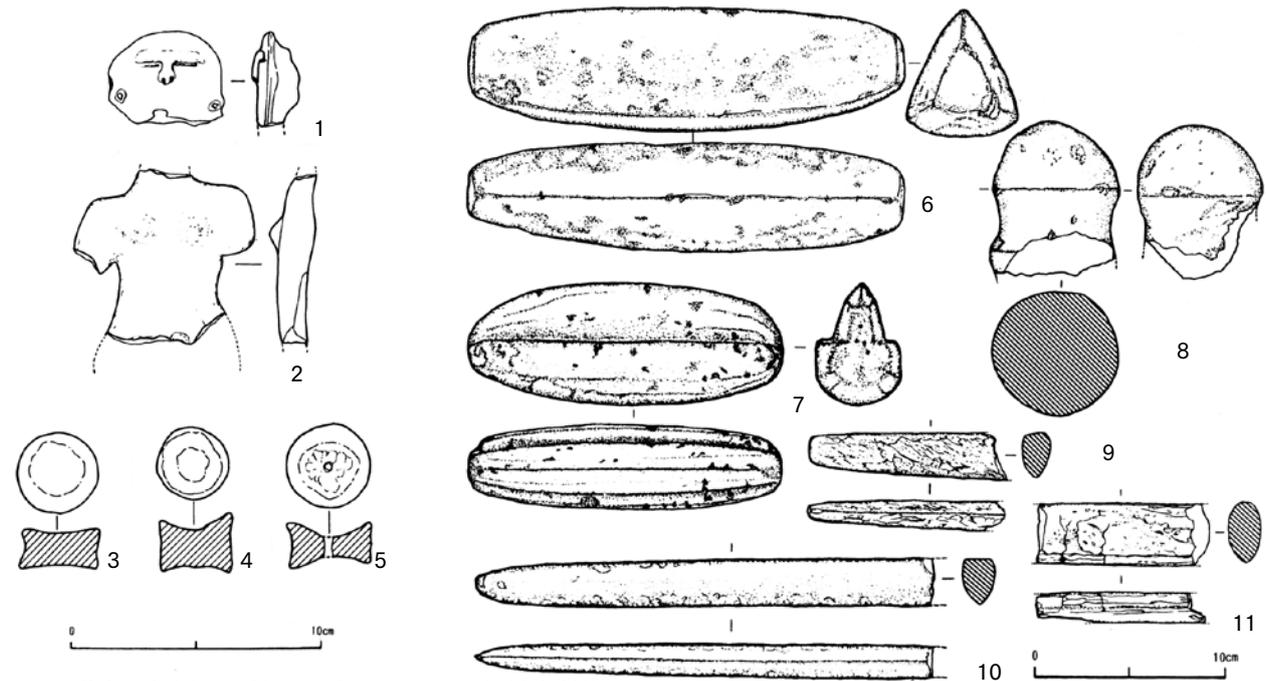


图 20 茶磨山遺跡出土土製品・石製品 (1:3、1:4) (牟礼村教委 1980)

1・2土偶, 3~5土製耳飾, 6・7石冠, 8独鉞石, 9~11石刀

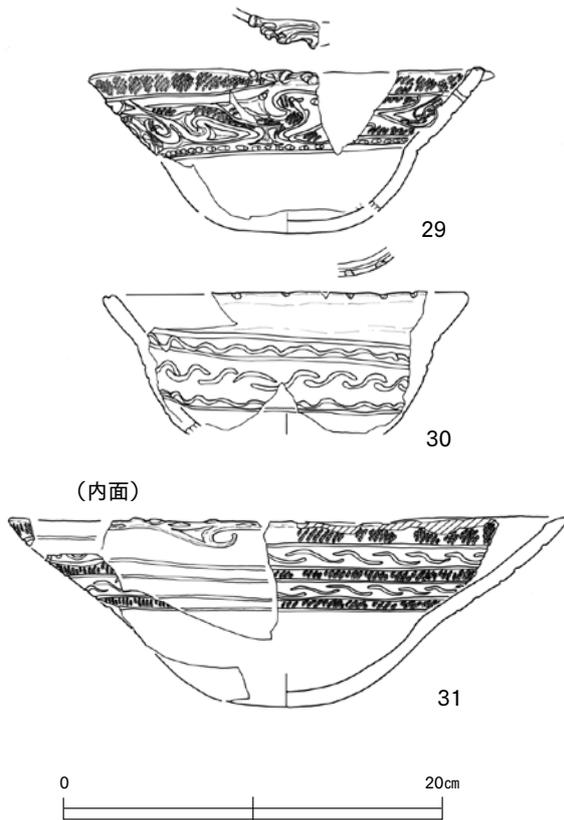


図 21 茶磨山遺跡出土縄文晩期土器 2 (1:4)

孔がある。6・7は石冠である。6は断面形が二等辺三角形，側面・底面の形は長方形に近い。7は断面形が凸字形，側面・底面とも長楕円形である。いずれも花崗岩製である。後に石冠の分類で6はⅢ類，7はⅣ類とされた(中島1983)。8は独鈷石である。断面形は円形，両端が丸く全体がずんぐりした形である。凝灰岩製である。9～11は石剣である。11は火を受けて赤化している。泥岩・緑色凝灰岩製である。

### (3) 成果の利用と研究の進展

縄文晩期の土器研究 調査団長を務めた永峯光一先生は，大冊『縄文土器大成4—晩期』の中で中部・北陸地方を執筆し，羊歯状文が基準となる晩期前葉「保地段階」の資料として，図19-1の完形土器の模式図を掲載した(永峯1981)。

石冠などの研究 報告書刊行後間もなく出版された『図説石器の基礎知識 縄文』(鈴木道1981)に，茶磨山遺跡の2点の石冠実測図が掲載された。多くの研究者や，筆者も含めて学生が利用した流通図書であり，広く知られることになった。直後

に『縄文文化の研究』第9巻に取り上げられ，本文中で引用したように分類された(中島1983)。同書では石冠出土地一覧表が掲載され，長野県では25遺跡が載っている。石冠が複数出土した遺跡は岐阜県の飛騨地方に近い，木曾地方と下伊那地方に集中している。1999年刊行された『岩波日本史辞典』(永原他1999)では，「縄文時代石器一覧図」に図20-7が掲載され，全国の石冠の代表例となっている。長野県内の独鈷石については，最近の研究で102遺跡が集成され，北信地方には20遺跡がある(長崎2019)。

## 7. 千曲川流域の縄文時代の生活

[図22～23]

これまで町内4遺跡の調査成果を紹介してきたが，飯綱町の遺跡発掘の成果だけでは語れないことがらを，千曲川流域にある遺跡の発掘から補ってみたい。上流から下流に下りながら説明する。

千曲市屋代遺跡群のサケ・マス漁労(県埋文2000b) 更埴インターの近く，地表下約5mで縄文中期末葉，加曾利EⅢ・Ⅳ式期の集落跡が見つかった。環状集落のおよそ半分を調査し，多数の敷石住居跡を含む53軒の住居跡を検出した。報告書の刊行後，採取してあった多量の土壌サンプルを水洗いし，サケ・マス類の骨を多数検出した。千曲川流域の縄文集落でサケ・マスが主要な食料資源となっていたことは，以前から予測されていたが，検証されたのは初めてであった。多数の掘立柱建物跡の堆積土から魚骨が採取されたことから，掘立柱建物がサケ・マス加工施設という説も出された。

中野市千田遺跡の環状集落(県埋文2013) JR飯山線の替佐駅辺りから千曲川までが遺跡範囲である。幅60m，長さ100m程の8区では，住居域の外径90m程の大規模環状集落跡を調査し，縄文中期中・後葉の住居跡52軒を検出した。環状集落跡の南半分を調査したと思われ，全体では約100軒の竪穴住居跡が埋もれているだろう。

中期後葉の初めには大木8b式古段階と火焰型・

王冠型土器で知られる馬高式土器が出土し、新潟県の文化圏の南限を示す。続く大木 8b 式中段階の住居跡には、長さ 2m 前後のコの字形炉がある。これ以後、石囲炉の普及が遅れていた北信地方でも、竪穴建物に石囲炉が定着する（綿田 2017c）。続いて大振りの突起・把手、隆帯の渦巻文で飾る桁倉 1・2 式土器に変わり、平口縁に圧痕隆帯が巡るだけの大型土器を組み合わせている。住居は長方形石囲炉とベッド状遺構を備えている。土器の変化と対応して住居の形が変わることから、越後側から人間集団の移動があったことが推定できる。次の加曾利 E II 式期には、炉は大きめの方形石囲炉となる。中期末葉に加曾利 E III 式土器とともに敷石住居が伝わり、集落は終焉する。

中期末葉、上流側に集落が移動し、千曲川に面した斜面に大規模な廃棄場が形成された。加曾利 E III・IV 式のほか、唐草文系土器 IV 期、長野県側にほとんど見られない沖ノ原式、串田新式、新潟市以北に分布する大木 10 式まで復元個体がある。遠隔地からも来訪者があった中核集落の可能性が高い。飯綱町の小野遺跡、小玉遺跡、明専寺遺跡の遺構・遺物の内容と移り変わりも、最寄りの拠点集落の千田遺跡と連動していることだろう。

千田遺跡では石器製作を行っていた。千曲川で容易に拾えるチャート素材に、石鏃、石錐やスクレイパーを製作した。拳大ほどの原石や石核も多い。集落の継続時期を通じて黒曜石の 90% 近くを、一貫して諏訪から入手していた。安山岩の巨礫を素材にした石皿の未製品もある。報告書作成時、全国で石皿製作していた遺跡は 10 遺跡に満たなかった。石材に恵まれた千田遺跡で製作された石器は、自家消費のほか交易品として広く流通したことだろう。一方 8 区では 180 点もの磨製石斧が出土した。糸魚川辺りに産するいわゆる蛇紋岩製が多く、上越方面から製品がもたらされた。明専寺遺跡の磨製石斧の多さも関連しよう。

中野市栗林遺跡のクルミ貯蔵穴群と水さらし場（県埋文 1994）オリンピック道路の栗林インター付近に、縄文中期末葉から後期前半の集落がある。

検出した住居跡は 5 軒だが、湧水点にクリ材で構築された水さらしのための木組遺構と、貯蔵穴 78 基がある。湿地に掘り込まれた低地型貯蔵穴で、クルミ 1364 個が出土した。報告書の考察では、貯蔵穴 1 基に蓄えられたオニグルミは約 5 万個、殻を除いた可食部分のカロリーは、成人 6 人の家族 2 か月分を維持できるとの試算がある。結論までの過程が複雑なので、図 22 を参照していただきたい。

栄村ひんご遺跡のトチノキ利用と信越交流（県埋文 2018）千曲川左岸の段丘微高地に展開するひんご遺跡では、延長約 150m、幅約 10m の調査区から、縄文中期後葉から後期前半までの竪穴建物跡 25 軒、敷石住居跡 7 軒、掘立柱建物跡 5 棟などを検出した。敷石住居跡の千曲川・信濃川流域での北限は津南町であり、ひんご遺跡は限界に近い。掘立柱建物は新潟県では中期以降多数が見られ、ひんご遺跡では調査区の平坦面に建てられている。後期前半、長野側の竪穴建物、敷石住居と、新潟側の掘立柱建物が共存している。土器製作のための粘土採掘坑も検出された。

遺跡の堆積土には全般に炭が多く、水洗した炭化物には多量のトチノキの実があり、クルミが続く。クリは少なく、ササゲ属が見られた。トチノキの利用は食料だけではなく、焼けた骨も多く、イノシシが最多、少数個体ではヘビ、サケ・マス、コイ、アクセサリーのサメの歯があった。アスファルトで接着した石鏃、補修された土器、アスファルト塊があり、新潟側の産物である。信越交流のあり様がよくわかる遺跡である。

安曇野市北村遺跡の集団墓地と人骨カルテ（県埋文 1993、平林 1995）長野自動車道の明科トンネル南口、犀川右岸の段丘に立地する。崖錐堆積の地表下 5m で検出された、中期末葉から後期前半の敷石住居主体の住居跡 59 軒の集落と、密集する 469 基の墓壇を検出した（図 23）。117 基は遺体に接して石を置く。当初は頭・足先、堀之内 2 式期以降両側・周囲が増加し、石棺墓が現れる。墓壇上面に石を配置した配石墓は 76 基あり、周

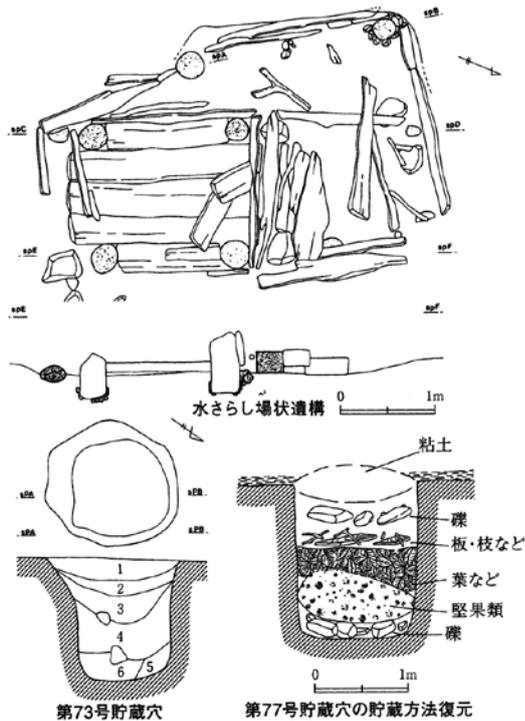


図 22 中野市栗林遺跡のクルミ貯蔵穴と水さらし場遺構 (1:80) と貯蔵量試算 (長野県埋文センター 1994)

囲に礫を並べる型と数点の礫で墓壇上面を覆う型がある。部分骨まで含めて人骨 300 体、そのうち 105 体は埋葬姿勢がわかる。成人を埋葬した土坑の規模は、平均  $106 \times 59$ cm の楕円形、深さ 32cm である。約 86% が単葬、合葬 6 例、集積埋葬 5 例、埋葬姿勢は仰臥 92 体、側臥 10 体、伏臥 3 体である。下肢は屈葬が 84 体と仰臥屈葬が主流で、伸展葬は稀である。上肢は腕を伸ばす型と、強く曲げ胸・肩に手を置く型とがある。着用品には、主にイノシシの牙を材料にした骨角製垂飾・腕輪・かんざしがある。

人骨群の所見によると、成人の平均身長は男性 157.9cm、女性 151.2cm と全国と変わらない。平均寿命は 34.1 歳でやや長生き、40～60 歳の熟年から老年が集団の 40% を占める。16～20 歳の女性には出産痕がある。むし歯は一人平均 0.2 本で、古代まで含めても全国一番にむし歯が少ない集団である。歯石や歯槽膿漏は少なくなく、飢餓などのストレスで出現するエナメル質減形成は、貝塚縄文人より出現率が高い。骨に含まれるコラーゲン分析では、たんぱく源を全国一高い比率で木の実に求めていた集団であった。

千曲川流域の縄文中・後期遺跡の様々な調査成

### 栗林遺跡 73 号貯蔵穴のクルミ貯蔵量と有効性

①貯蔵穴の法量：径 130cm、深さ 124cm、円筒形、深さの半分貯蔵空間と推定

径  $65\text{cm} \times 65\text{cm} \times \text{深さ } 62\text{cm} \times 3.14 = 822.523\text{cm}^3 = 822.523 \text{ l}$  貯蔵量は約 823 l

採取した原生クルミ 95 個 =  $1.469\text{cm}^3$  クルミ 95 個が体積 1.5 l

この貯蔵穴の貯蔵量に対するクルミの個数  $823 \text{ l} \div 1.5 \text{ l} \times 95 = 52.123$  個

◎本貯蔵穴はクルミ約 5 万個の貯蔵量がある

②貯蔵されたクルミのカロリー量

クルミ 100g につき可食部分 25% = 25g = 672Cal に相当

乾燥状態のクルミ 1 個の重量平均値 8.7 g に個数をかけ重量を求めるクルミの総重量  $52.123 \times 8.7\text{g} = 453,470.1\text{g}$

これを 100g で割り可食分 25% に 672Cal をかけ、Cal 量を求める  $453,470 \div 100 \times 25 \div 100 \times 672 = 761,470.1$

◎ Cal 量は約 76 万 Cal

③貯蔵穴のクルミで何人を養えるか

成人一人当たり 1 日 2000cal 必要と仮定すると、一人で 380 日分の Cal 量

一家族 6 人 (成人で計算) として単純計算すると 63.3 日分、2 家族で 31.6 日分

◎一基の貯蔵穴で 1 家族約 2 か月分のカロリー摂取が可能

果を紹介した。飯綱町の遺跡の調査成果に、これらの遺跡から明らかになった成果を重ね合わせれば、飯綱町の縄文人の暮らしぶりと縄文人像がより鮮明に描き出せることであろう。

## 8. 縄文時代の飯綱町の特徴

遺跡数が多い南信地方の遺跡変動に支えられた長野県の縄文時代遺跡数の推移と比較し、遺跡数が少ないながら前期から中期への増加と、後期への減少の幅が小さい北信地方の遺跡数変動の流れの中に、飯綱町周辺の遺跡の動きも位置づくものとする。大きな増減がない、言葉を替えれば安定した遺跡数を維持できた背景に、千曲川の水産資源と、粘土や石材を利用した道具製作、それに関連した人と物の盛んな交流があったのではなかろうか。そのような交流網の中に、飯綱町の遺跡も位置していたのだろう。

発掘調査の機会は限られているが、前項で紹介した北信地方の大規模な拠点集落は、千曲川沿岸に立地している。遺跡の継続時期の時間幅は異なるが、多くは多数の住居や施設を営み、多量の土器・石器が出土し、遠隔地を含めて交易によって入手した物資を残している。

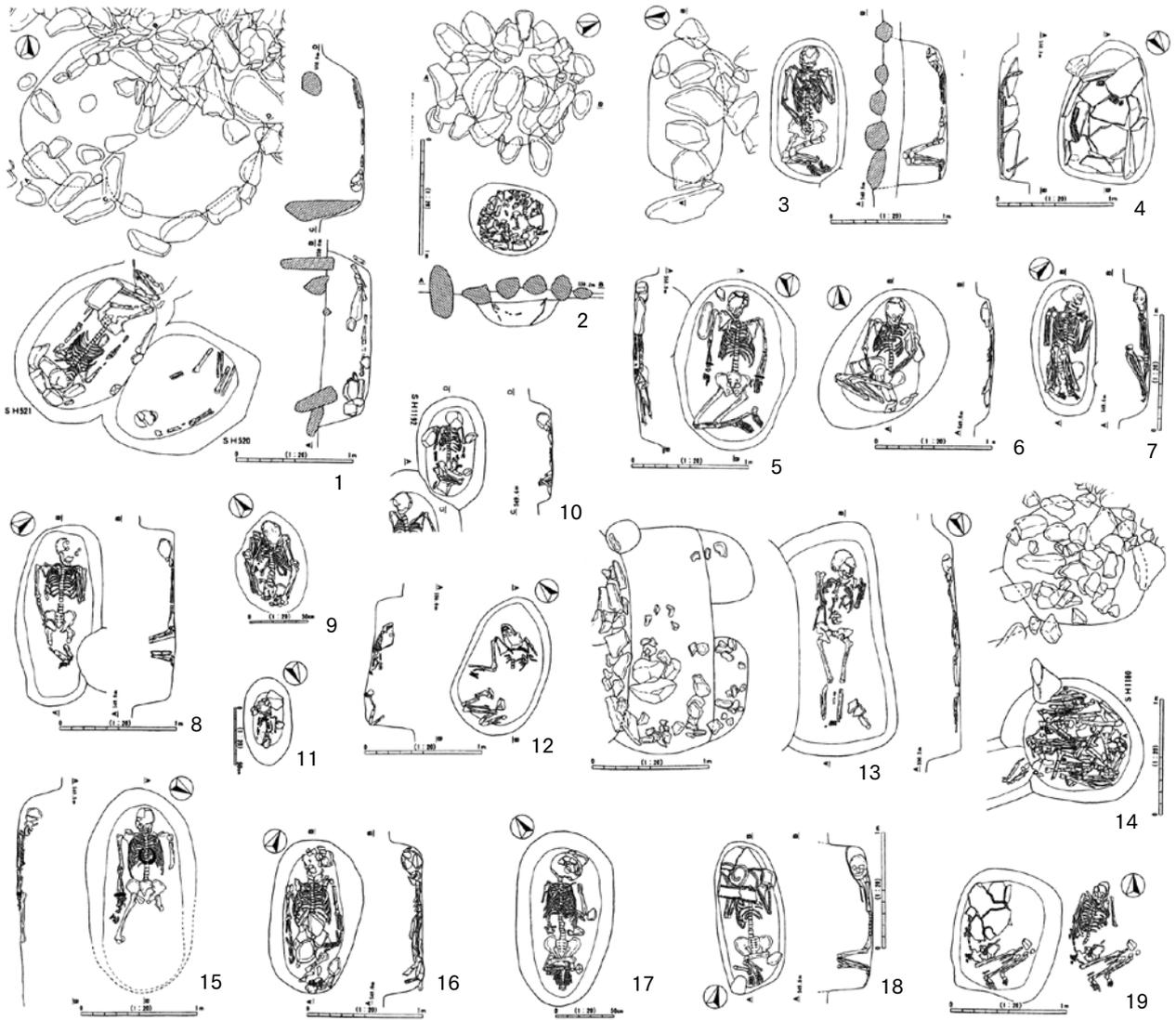


図 23 安曇野市北村遺跡の縄文中期末葉から後期前半の葬墓制 (1:60)

1 SH520・521. 2 SH522. 3 SH859. 4 SH973. 5 SH805. 6 SH1136. 7 SH803. 8 SH763. 9 SH1211. 10 SH1192. 11 SH1166. 12 SH815. 13 SH958. 14 SH1180. 15 SH1172-1. 16 SH1204. 17 SH1215. 18 SH784. 19 SH972

このような拠点集落と見られる遺跡に対した、飯綱町を含む山間部遺跡は時間幅が比較的短く、住居跡数は1・2軒から10軒くらいで、土坑が密集する状況もない。こうした状況が千曲川の拠点集落との差なのか、季節的に移り住んで特定の生業活動を営んだのか、簡単に解答は導けない。

遺跡の時間幅が短いことは、考古学の研究には好適な面がある。丸山遺跡の早期末葉・前期後葉土器、上赤塩遺跡の中期前葉・中葉土器、小野遺跡・小玉遺跡の中期末葉から後期前半土器、明専寺遺跡の後期前半土器、橋詰遺跡の後期後葉・晩期前半土器、茶磨山遺跡の晩期前葉・中葉土器といっ

た時期の錯綜がない遺跡は、資料の時期を絞って研究できる利点がある。ここに挙げた遺跡の土器群だけでも、早期から晩期まで復元個体が含める。近隣の信濃町の草創期・早期・前期前半土器、上浅野遺跡の前期後半・中期初頭土器、千田遺跡の中期土器を加えれば、長野盆地北部の千曲川左岸域という一つの地域で、ほぼ間断ない土器の変遷と周辺地域との影響関係のあり様が見てとれる。

遺跡が多い中期末葉には在地化した加曾利E系、大木系、圧痕隆帯文系の主流3系統に、唐草文系、北陸系が加わることは述べたが、折衷的な土器や他系統の影響が見られる変容した土器など

から、土器作りに関わった人間集団にアプローチする研究にも展開できるかもしれない。今回は資料がそろっている土器に着目したが、石器組成から見た生業や石材利用、土器の胎土分析や黒曜石産地推定など自然科学分析の成果にも期待したい。

時代や遺跡の特徴ではないが、飯綱町がことさらに縄文遺跡が多く、大規模な調査が進展しているとは言えないだろう。国指定文化財も現在はない。にもかかわらず、多くの考古資料が全国流通する出版物に掲載され、考古学を学ぶ人々の利用に供されていることに驚いた。個々に記述しなかったが、実測個体土器の多くは『長野県史考古資料編遺構・遺物』（樋口他 1988）に掲載されている。その多くは昭和末期に調査・報告されたものである。しっかりした実測図と写真で可視化され、適切な報文による記録保存報告書が、広く長く活用されることの重要性を、強く感じた。

### 謝辞

「はじめに」で記したとおり、本稿はふれあい館が企画・開催した町制 15 周年記念関連行事の一環としての御依頼と御支援によって、形になったものです。富樫 均館長と小山丈夫学芸員・係長には、6 月以降長い間講演会・寄稿に関わる全般の御手配から、実測対象とした展示資料の上げ下ろしまで手厚い御高配をいただきました。しかしながら、主催者と参加者の御期待に添えたか、心もとない心境です。埋蔵文化財整理室の横山かよ子、富岡鹿子、柳澤まち子の 3 氏には、同室の使用と拓本作業に御協力いただいたほか、出土品再整理の経過を取材させていただきました。新たに実測した茶磨山遺跡出土の晩期縄文土器については、百瀬長秀氏に御教示をいただきました。

本稿で紹介してきた遺跡の発掘調査団を指導し、調査を担当された永峯光一、高橋 桂、小林 孚、金井正三、島田恵子の諸先生、諸氏は鬼籍に入られました。発掘調査以来御指導いただいた方々や、学生として参加した私たちが定年を過

ぎました。

今回お世話になった皆様と、飯綱町の遺跡発掘で出会った多くの皆様に、深く感謝申し上げます。

### 参考文献

- 阿部昭典 2008 「有孔罎付土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 飯綱町教育委員会 2008 『小玉遺跡 小玉地区コミュニティ消防センター新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 飯綱町教育委員会 2012 『小野遺跡 昭和 50 年度県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 飯綱町教育委員会 2016 『飯綱町遺跡詳細分布調査報告書』
- 飯綱町教育委員会 2017 『平成 24 ～ 27 年度町内遺跡発掘調査報告書』
- 飯綱町教育委員会 2021 『町制 15 周年記念特別展 図録 飯綱町の文化財』
- 柏崎市教育委員会 2001 『十三本塚北一新潟県柏崎市十三本塚遺跡群・十三本塚北遺跡発掘調査報告書』
- 金井正三他 1976 「北信濃大倉崎遺跡調査報告」『信濃』Ⅲ第 28 巻 4 号
- 金井正三 1979 「縄文前期の特殊浅鉢形土器について」『信濃』Ⅲ第 31 巻 4 号
- 小杉 康 1985 「木の葉文浅鉢形土器の行方」『季刊 考古学』第 12 号
- 小杉 康 2003 『先史日本を復元する 3 縄文のマツリと暮らし』岩波書店
- 児玉卓文 1980 「絡縄体圧痕文土器」『編年—中部高地における型式—旧石器・縄文・弥生編』千曲川水系古代文化研究所
- 小林謙一 2017 『縄紋時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—』同成社
- 小柳義男 1997 「縄文時代」『牟礼村誌』
- 酒井重洋 2008 「中屋式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 笹澤 浩他 2001 「豊野町の資料 (1) 考古資料」『豊

- 野町誌』
- 三水村教育委員会 1997『上赤塩遺跡発掘調査報告書—縄文中期の集落址—』
- 品田高志 2002「新潟県における縄文後期前葉期の土器群—柏崎市十三本塚北遺跡を中心にして—」『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』・『第15回縄文セミナー後期前半の再検討—記録集—』
- 信濃史料刊行会 1956『信濃史料第1巻上・下』
- 信州新町教育委員会 1989『お供平遺跡II』
- 鈴木克彦 2004「華燭土器」『縄文時代』15
- 鈴木徳雄 1993「縄紋後期注口土器の成立—形態変化と文様帯の問題—」『縄文時代』3
- 鈴木徳雄 2018「縄紋後期前半における土器型式の存立構造—関東信越地域の「型式」と諸“類型”」『地域考古学』3
- 鈴木道之助 1981『図説石器の基礎知識—縄文—』柏書房
- 関根慎二 2008「諸磯式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 谷口康浩 1989「諸磯式土器様式」『縄文土器大観 1 草創期 早期 前期』小学館
- 谷口康浩 2019『入門 縄文時代の考古学』同成社
- 堤 隆 2009『ビジュアル版 旧石器時代ガイドブック』シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊02 新泉社
- 勅使河原彰 2013『ビジュアル版 縄文時代ガイドブック』シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊03 新泉社
- 寺崎裕助 2011「越後の縄文前期後半期土器研究の展望—刈羽式を中心に」『第24回縄文セミナー縄文前期土器研究の現状と課題』
- 戸沢充則 1982「長野県の遺跡概観」『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』
- 中郷村教育委員会 1998『籠峰遺跡II 遺物編』
- 長崎元広 2019「信濃の独鈷石とその周辺(1)・(2)」『長野県考古学会誌』157・158
- 中沢道彦 2004「佐野式土器研究の現状と課題」『第17回縄文セミナー 晩期中葉の再検討』・『第17回縄文セミナー 晩期中葉の再検討—記録集—』
- 中沢道彦 2008「佐野式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 中島栄一 1983「石冠」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣
- 長野県教育委員会 1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その5 阿久遺跡』
- 長野県史刊行会 1981『長野県史考古資料編全1巻(1) 遺跡地名表』
- 長野県埋蔵文化財センター 1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11 明科町内 北村遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1994『県道中野豊野線バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 栗林遺跡 七瀬遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000a「三田原遺跡・岩下遺跡・郷土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19』小諸市内3
- 長野県埋蔵文化財センター 2000b『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24 更埴市内その3 更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪川原遺跡) 縄文時代編』
- 長野県埋蔵文化財センター 2013『中野市千田遺跡 千曲川・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 中野市内その1』
- 長野県埋蔵文化財センター 2018『栄村ひんご遺跡 社会資本整備総合交付金(広域連携)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長野市教育委員会 2010『浅川扇状地遺跡群吉田町東遺跡(3) 浅川扇状地遺跡群駒沢新町遺跡(3)』
- 永原慶二他 1999「縄文時代石器一覧図」『岩波日本史辞典』岩波書店
- 永峯光一 1981「中部・北陸地方」『縄文土器大成4—晩期』講談社
- 賛田 明 2010「長野県における浅鉢形土器の様相」

- 『第 23 回縄文セミナー縄文前期浅鉢形土器の諸様相』
- 樋口昇一他 1988 「II 時代と編年 2 縄文土器」『長野県史考古資料編全 1 巻 (4) 遺構・遺物』
- 平林 彰 1995 「北村縄文人の墓と社会」『縄文人の時代』新泉社
- 文化庁文化財部記念物課 2017 『平成 28 年度埋蔵文化財統計』
- 水戸部秀樹 2019 『縄文漆工芸のアトリエ押出遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」133 新泉社
- 宮崎朝雄・綿田弘実 2013 「長野県における縄文時代中期土器の編年」『一般社団法人日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路信州』
- 宮下健司 1989 「東海条痕文系土器」『縄文土器大観 1 草創期・早期・前期』
- 牟礼村教育委員会 1979 『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』
- 牟礼村教育委員会 1980 『明専寺・茶臼山遺跡』
- 牟礼村教育委員会 1981 『矢筒城館跡』
- 牟礼村教育委員会 2000 『茶磨山遺跡 緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 守矢昌文 2013 「諏訪地域における縄文時代中期の土器群構成とその分布」『一般社団法人日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路信州』
- 山本暉久 2002 『敷石住居址の研究』
- 綿田弘実 1983 「北信地方における縄文中期後葉より後期初頭の土着土器」『須高』17
- 綿田弘実 1985 「小県郡東部町和中原遺跡出土の後期縄文土器」『上小考古』18
- 綿田弘実 1988a 「北信濃における縄文中期後半土器群概観」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 綿田弘実 1988b 「縄文後期の土器 後期前葉土器群」『長野県史考古資料編全 1 巻 1 (4) 遺構・遺物』
- 綿田弘実 1999 「千曲川水系における縄文中期末葉土器群」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 綿田弘実 2000 「長野県の縄文早期末葉土器群」『第 13 回縄文セミナー早期後半の再検討』・『第 13 回縄文セミナー早期後半の再検討—記録集—』
- 綿田弘実 2002 「長野県の縄文後期前葉土器群 II」『第 15 回縄文セミナー後期前半の再検討』・『第 15 回縄文セミナー後期前半の再検討—記録集—』
- 綿田弘実 2003a 「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第 16 回縄文セミナー中期後半の再検討』・『第 16 回縄文セミナー中期後半の再検討—記録集—』
- 綿田弘実 2003b 「千曲川流域の縄文早期末葉絡条体圧痕文土器」『長野県考古学会誌』101
- 綿田弘実 2007 「中部高地における縄文中期末から後期初頭の在り系土器について」『第 20 回縄文セミナー』・『第 20 回縄文セミナー—記録集—』
- 綿田弘実 2008 「郷土式・圧痕隆帯文土器・大木系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 綿田弘実 2012a 「形と文様は交流を語る—縄文土器—」『平出博物館ノート』26
- 綿田弘実 2012b 「北陸・中央高地の縄文集落の生活と生業」『シリーズ縄文集落の多様性 III 生活・生業』雄山閣
- 綿田弘実 2012c 「北信地域縄文中期遺跡の推移と特徴」『長野県考古学会誌』143・144 合併号・『長野県考古学会設立 50 周年記念シンポジウム 縄文時代中期文化の繁栄を考える 別冊資料』
- 綿田弘実 2013a 「中部山岳洞窟遺跡の縄文土器」『縄文時代』21
- 綿田弘実 2013b 「長野県における縄文時代中期土器群の分布状況」『一般社団法人日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路信州』
- 綿田弘実 2015 「長野県における縄文時代後期注口

土器の様相」『第 28 回縄文セミナー縄文後期  
注口土器の諸様相』

綿田弘実 2016 「千曲川下流域における縄文時代中  
期後葉土器群」『考古学の諸相IV』立正大学  
考古学会

綿田弘実 2017a 「特集長野県の敷石住居跡」『信州  
の遺跡』10

綿田弘実 2017b 「縄文時代」『須坂市誌第 3 巻歴  
史編上』須坂市

綿田弘実 2017c 「千曲川下流域における縄文時代  
中期の住居跡」『山本暉久先生古稀記念論集  
二十一世紀考古学の現在』

綿田弘実 2021 「堀之内式並行期の文化様相」『千  
曲川—信濃川流域の先史文化』津南学叢書第  
40 輯





1 丸山遺跡調査状況



2 同 12号土坑調査状況



3 同 17号土坑調査状況



4 同 2B号土坑遺物出土状況



5 同 17号土坑出土有孔浅鉢(大・小)



6 同 有孔浅鉢(大)下面



7 同 有孔浅鉢(小)下面

図版 1 : 丸山遺跡



8 小野遺跡調査区全景（芋川神社前から）



9 同 敷石住居跡 SB04（南から）



10 同 縄文中期末葉深鉢



11 同 両耳壺



12 同 注口付鉢形土器



13 同 縄文後期前葉鉢



14 同 注口土器  
（左側面・正面・右側面）

図版2：小野遺跡



15 明専寺遺跡調査区全景（南西から）



16 同 調査区全景（北西から）



17 同 J2 号住居跡完掘（南から）



18 同 J2 号住居跡奥壁遺物出土状況



19 同 J1 号住居跡炉（西から）



20 同 J1 号住居跡完掘（南西から）



21 同 北拡張区鉢被葬土器



22 同 D1 号土坑（北から）

図版 3：明専寺遺跡



23 茶磨山遺跡調査区全景（東から）



24 同 調査状況（南から）



25 明専寺遺跡縄文後期前葉深鉢 1



28 明専寺遺跡 同 鉢 2



27 明専寺遺跡 同 鉢 1



26 明専寺遺跡 同 深鉢 2



29 茶磨山遺跡縄文晩期中葉浅鉢



30 茶磨山遺跡 同 浅鉢 2



31 茶磨山遺跡 同 浅鉢 3

図版 4：茶磨山遺跡、縄文土器